



始



近代樂典大要

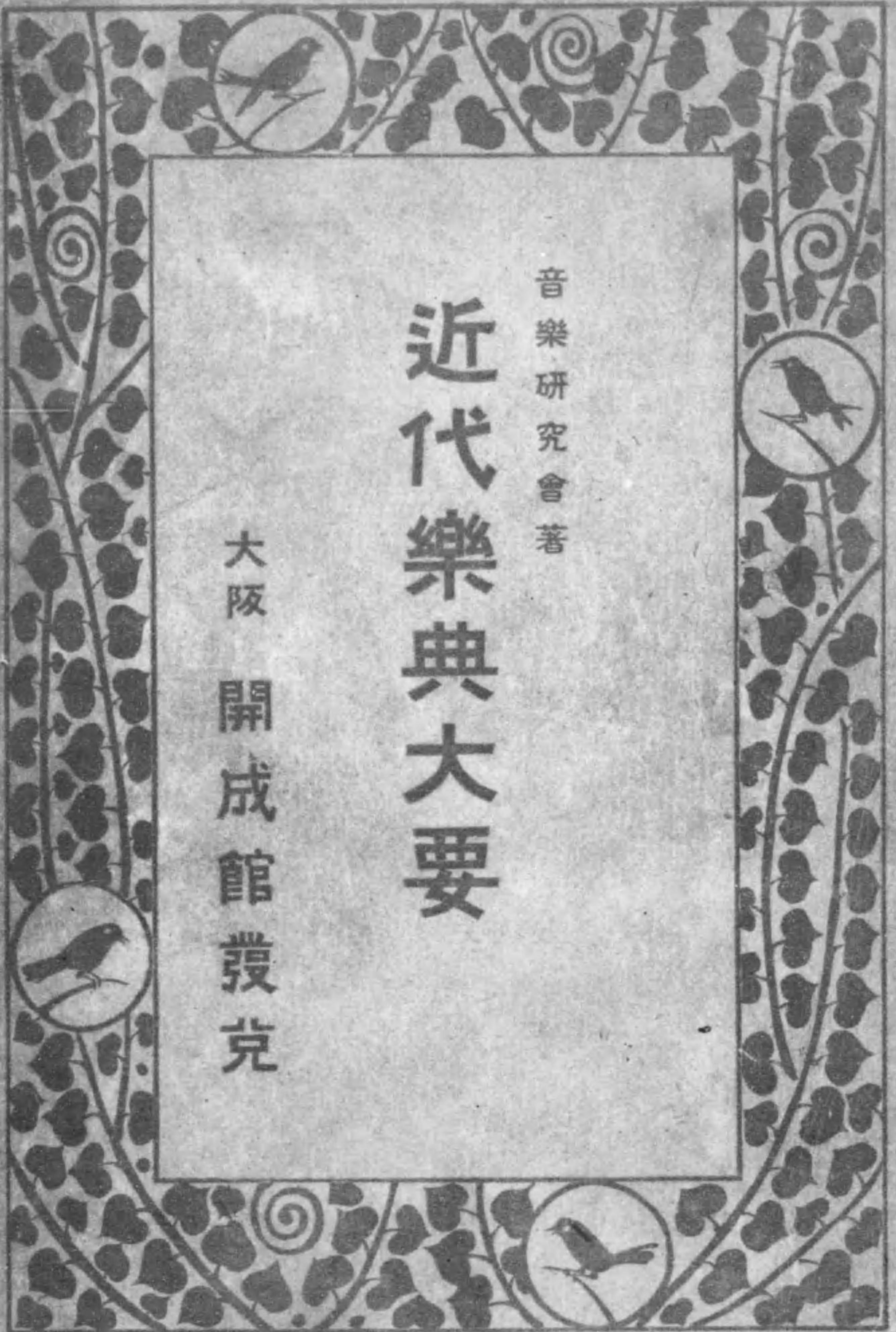


320
212

音樂研究會著

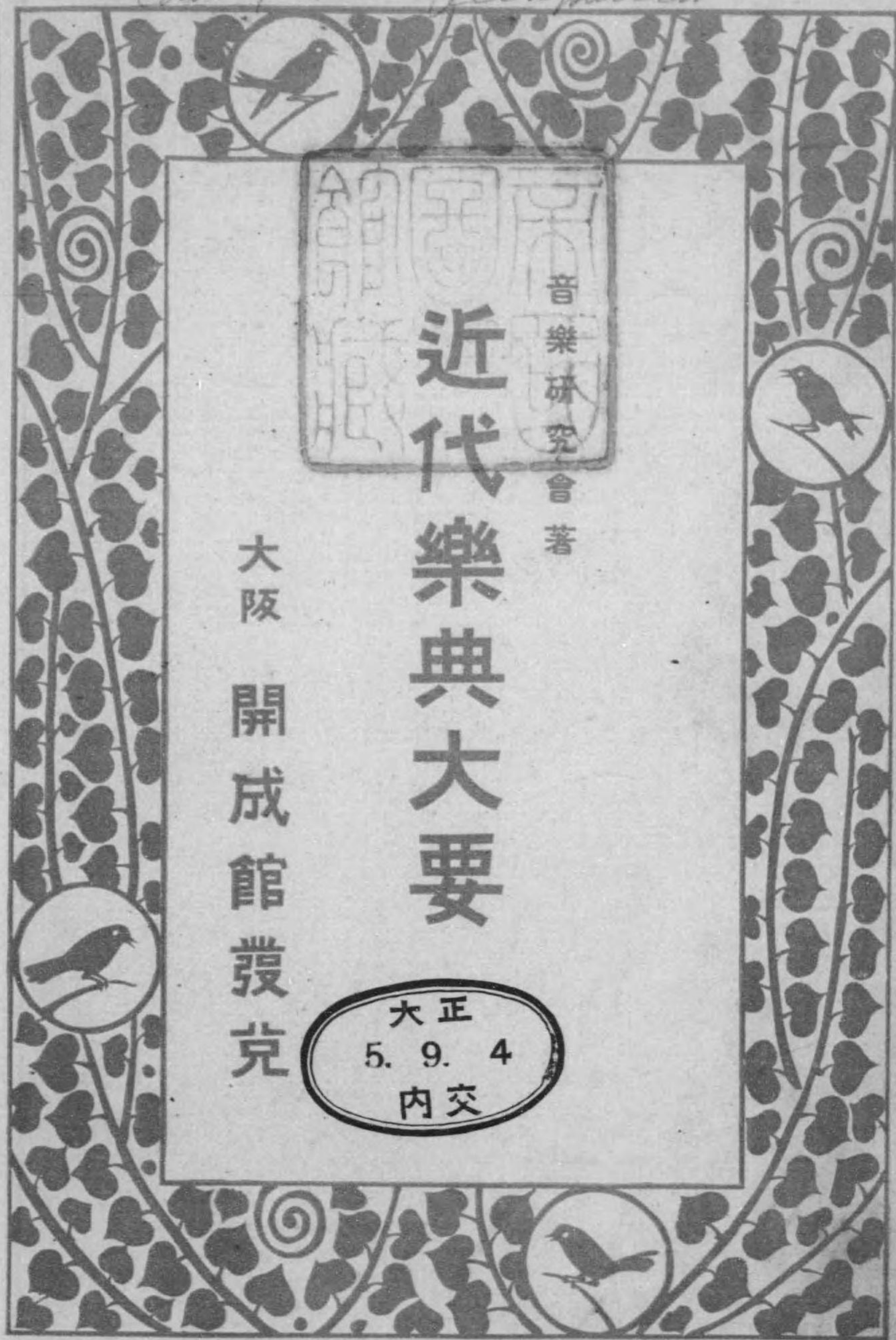
近代樂典大要

大阪 關成館發兌



320
252

Covered *Occupation*



近代樂典大要

音樂研究會著

大阪 開成館發行

大正
5. 9. 4
內交

緒 言

「読みにくい本」さか「つまらない本」さか云ふ言葉は、楽典を読んだ人から、聞かせられた、非難でありますから、私は今此書に筆を執るに當り、なるべく、興味を以て讀まれる様に、成る可く普通の言葉で、平易に講義をして見ました。

然し此書は、主として、**高等女學校**及び**師範學校**の教科書に適用されるやうに、書いたもので、ありますから、やはり、従來の教科書の様に、「章」や「節」に分けて、記述しました。

「用語」や「術語」も、成るべく、従來使用して來たものを、その儘、採りましたが、特にむつかしいと思はれるものは、わざと平易な語に書き易へたものも、尠く

ありません。又「ソプラノ」や「バスソ」などの様に、殆ど譯す必要もない程、一般的になつて居る言葉は、その儘、假名で記載しておきました。

項目の順序も、不適當と認めたものは、間々、從來のものを變へた個處もあります。

大正五年二月二十四日

著者識

近代樂典大要

目次

第一章	譜表	①
第一節	音樂的文字と様式	①
第二節	單譜表	①
第三節	臨時に起る「線」と「間」	②
第四節	複譜表	③
第二章	音符	④
第一節	音符	④
第二節	單純音符	⑤
第三節	附點音符	⑤
第三章	休止符	⑦
第一節	單純休止符	⑦
第二節	附點休止符	⑧
第四章	音名	⑨
第五章	音部記號	⑨
第一節	女聲音部記號	⑩
第二節	男聲音部記號	⑪
第六章	拍子	⑪

第一節 二拍子.....(14)

第二節 四拍子.....(15)

第三節 三拍子.....(16)

第四節 六拍子.....(16)

第五節 不完小節.....(17)

第六節 變拍子.....(18)

第七節 切分音.....(19)

第八節 拍法或は指揮法.....(20)

第七章 變化記號.....(21)

第一節 嬰記號.....(22)

第二節 變記號.....(22)

第三節 復位記號.....(23)

第八章 速度に關する標語.....(24)

第一節 樂曲の全体を支配する標語.....(24)

第二節 樂曲の一部を支配する標語.....(25)

第九章 發想に關する標語と記號.....(27)

第一節 強弱に關する發想記號.....(27)

第二節 曲想に關する發想記號.....(28)

第十章 雜記號.....(29)

第一節 小黑點と垂點.....(30)

第二節 連結記號と結合記號.....(30)

第三節 停滯記號と延長記號.....(31)

第十一章 略記法.....(33)

第一節 小節に關する略記法.....(33)

第二節 音符に關する略記法.....(34)

第三節 休止符に關する略記法.....(34)

第十二章 裝飾音.....(35)

第一節 倚音.....(35)

第二節 回音.....(36)

第三節 顛音.....(37)

第四節 漣音.....(38)

第五節 琵琶音.....(38)

第十三章 音程論.....(39)

第一節 全音階的音程.....(39)

第二節 半音階的半音.....(40)

第三節 協和音程と不協和音程.....(41)

第四節 音程の轉回.....(42)

第十四章 音階と三和音.....(43)

第一節 長音階.....(44)

(一) 嬰種長音階の構成法.....(46)

(二) 變種長音階の構成法.....(49)

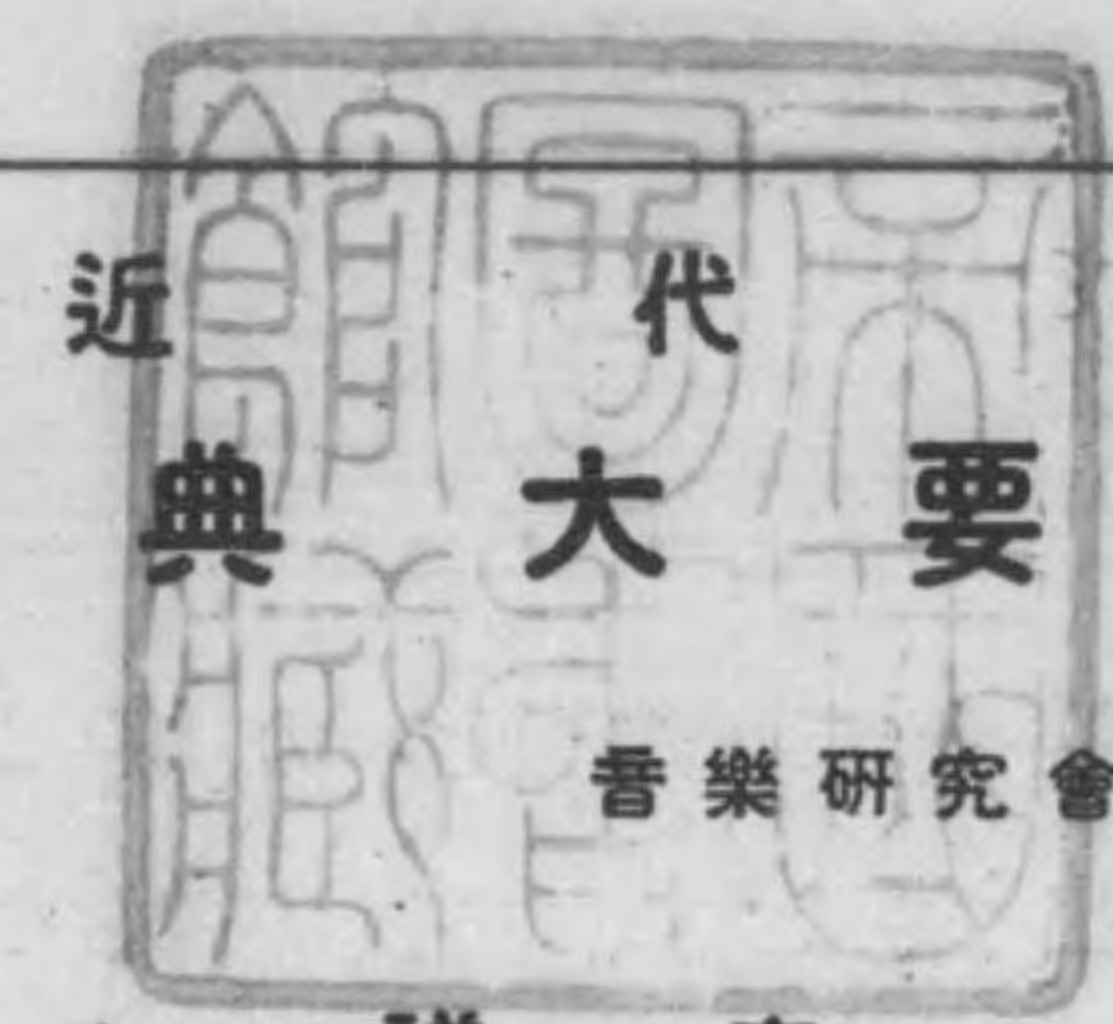
④

第二節	三和音	51
第三節	短音階	53
(一)	和聲的短音階	54
(二)	旋律的短音階	54
第十五章	和聲の大要	57
第一節	和絃	57
第二節	四つの聲音	58
第三節	和絃の轉回	60
第四節	四和音	61
第五節	和聲的聲音の進行	64
第六節	和聲の終止法	65
第十六章	轉調	66
第十七章	移調	68

附 録

箏 の 事

(目次終)



近代音樂大要

音樂研究會著

第一章 譜表

第一節 音樂的文字と様式

私共が「言語」を記す場合に、「文字」と、その「文字」を書き連ねる「一定の形式」が必要であると同様に、私共の「音樂的言語」を記録するには、謂はゆる「音樂的文字」と、その「文字」を書き連ねる「音樂的形式」が必要であります。此「音樂的文字」と云ふのは「音符」であつて、「譜表」はその「音符」を書き連ねる「形式」に他ありません。

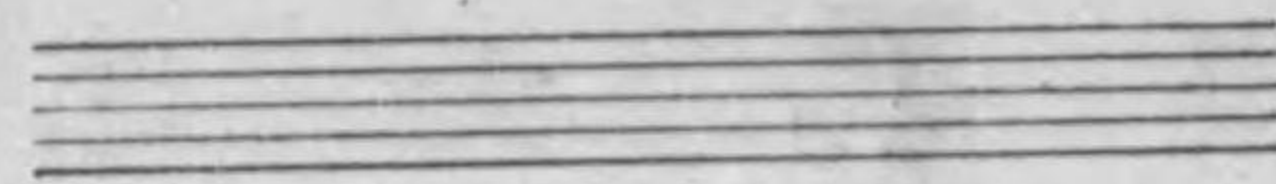
第二節 單譜表

「單譜表」は、同じ距離を保つて、水平に相並行した「五つの直線」から成り

單譜表

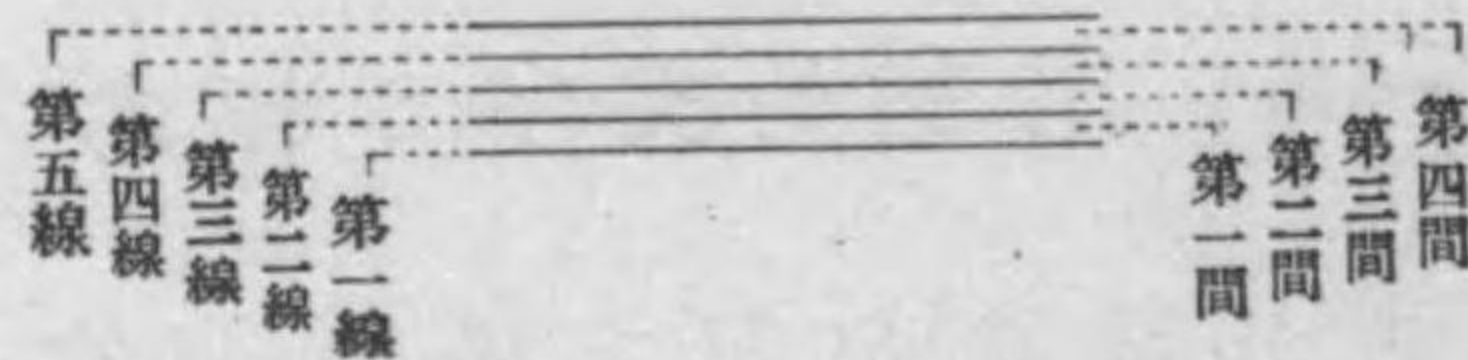
②

立つて居ります。



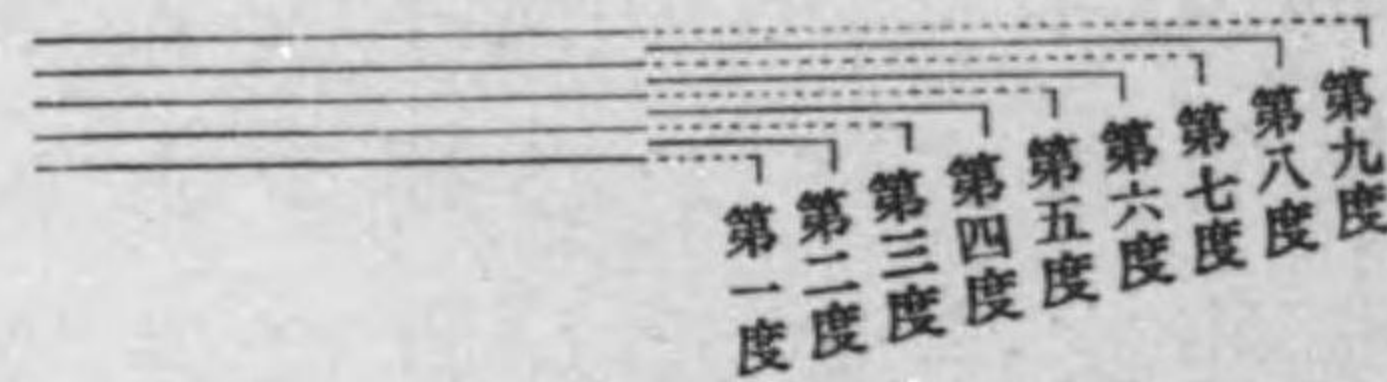
線
間

「單譜表」には、五つの「線」と四つの「間」が出来ます。その「線」や「間」は、通常下から上へ数へます。



度

「譜表」の各「線」や各「間」は、「度」と云ひます。それ故、一つの「單譜表」には「九度の位置」が出来ます。



第三節 臨時に起る「線」と「間」

前の「九度」に定められた「譜表」以外に起つて来る「音」を記載するには、「五線」の上または下に、「五線」を細断した短線を添へて表はし、之を「加線」と云

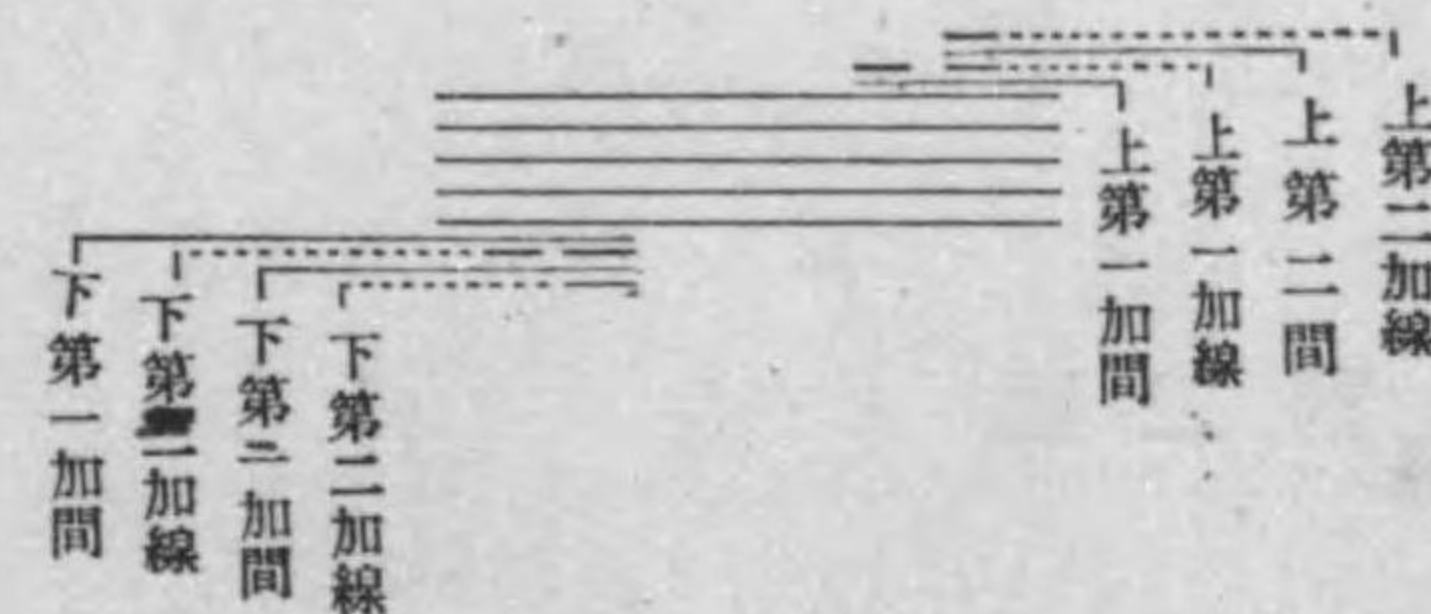
加
線

③

ひます。

「加線」によつて新たに生じた空間を「加間」と云ひます。

「加線」や「加間」が、「五線」の上部に添へられた場合には、「第五線」から順次に上方へ数へ、「五線」の下部に添へられた場合には、「第一線」から順次に下方に数へます。

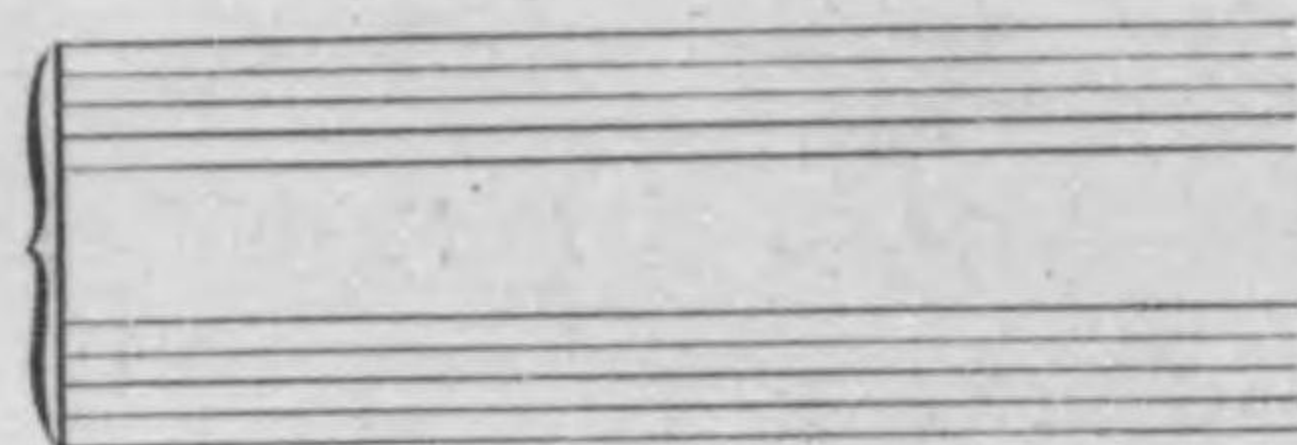


第四節 複譜表

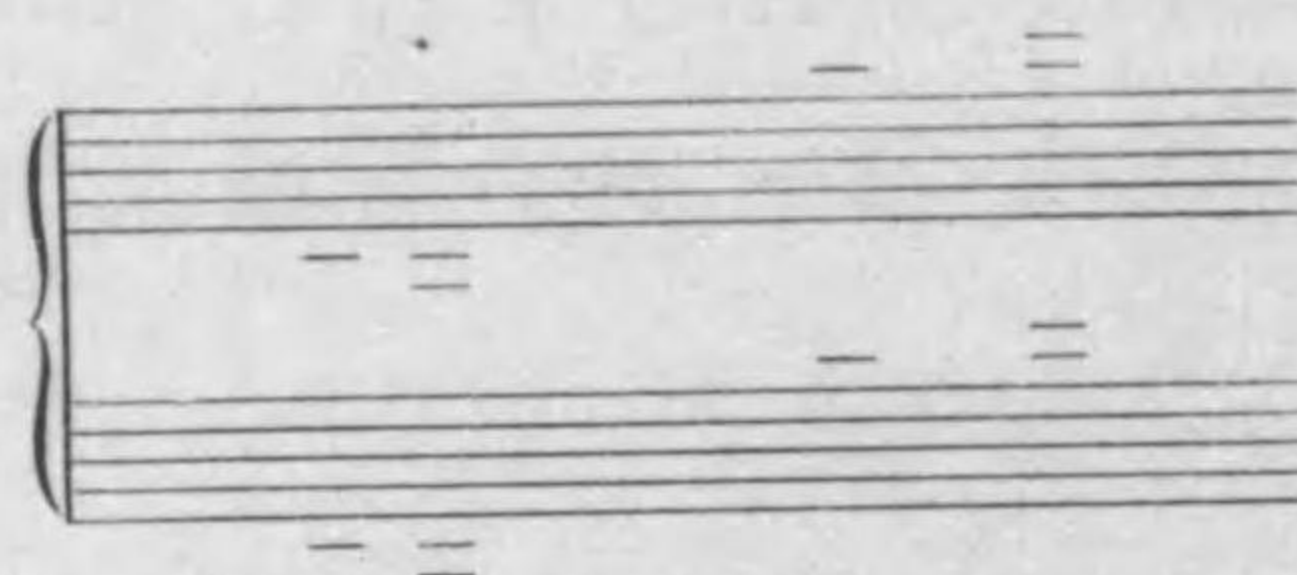
二つの「單譜表」を或距離を隔てて上・下に並べ、その左端を「弧線」と「垂直線」とに依つて結び連ねたものを、「複譜表」又は「大譜表」とも云ひ、有鍵樂器や、諸重音唱歌の樂曲を記載するに用ゐます。

複譜表
大譜表

④



「複譜表」にも勿論、必要に応じて、「加線」を用ゐます。



第二章 音符

第一節 音符

音符
符頭
符尾

「音符」は「音の時間上の長さ」を表はすための記號であつて、黑白の「橢圓」と、「垂直線」と「鉤」から構成されます。この「橢圓」を「符頭」と云ひ、「垂直線」と「鉤」を「符尾」と云ひます。

「音符」は、「單純音符」と「附點音符」の二つに分けます。

⑤

第二節 單純音符

普通用ゐられる「單純音符」は、次の六種であります。

單純音符
第二章 音符

形状	名稱	比較
○	全音符	○
ρ	二分音符	ρ ρ
♩	四分音符	♩ ♩ ♩ ♩
♪	八分音符	♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪
♫	十六分音符	♫♫ ♫♫ ♫♫ ♫♫
♬	卅二分音符	♬♬ ♬♬ ♬♬ ♬♬

第三節 附點音符

「附點音符」は「符頭」の右側に點が付けられた「音符」で、「一點」を付けられたもの、「二點」を付けられたものこの二種あります。

點の附いて居る「單純音符」は、其點に對して、之を「主音符」と云ひます。

「一點」の價値は、「主音符」の二分の一で、「二點」

附點音符
一點の價値

二價の點符
單音附點符
複音附點符

の價值は、主音符の四分の三であります。即ち「第二の點」は又「第一點」の二分の一の價值を持つ事になります。

「一點を附せられたもの」を「單附點音符」
「二點を附せられたもの」を「複附點音符」と云ひます。

普通用ゐられる「單附點音符」は五種、
「複附點音符」は四種であります。

形狀	名稱	比較
○ [•]	附點全音符	○ [•] = (○ + ♩) = ○ [•] ♩
♩ [•]	附點二分音符	♩ [•] = (♩ + ♩) = ♩ [•] ♩
♩ [•]	附點四分音符	♩ [•] = (♩ + ♩) = ♩ [•] ♩
♩ [•]	附點八分音符	♩ [•] = (♩ + ♩) = ♩ [•] ♩
♩ [•]	附點十六分音符	♩ [•] = (♩ + ♩) = ♩ [•] ♩

形狀	名稱	比較
○ ^{••}	複附點全音符	○ ^{••} = (○ + ♩ + ♩) = ○ ^{••} ♩ ♩
♩ ^{••}	複附點二分音符	♩ ^{••} = (♩ + ♩ + ♩) = ♩ ^{••} ♩ ♩
♩ ^{••}	複附點四分音符	♩ ^{••} = (♩ + ♩ + ♩) = ♩ ^{••} ♩ ♩
♩ ^{••}	複附點八分音符	♩ ^{••} = (♩ + ♩ + ♩) = ♩ ^{••} ♩ ♩

第三章 休止符

韻律は、音樂では絶えず音が響いて居るのではなく、時には音が切れて響きが止まり、又再び起るころがあります。我々が話をするのでもその通りで、言葉が切れたり續いたりします。

音符はその響きの續いて居ることを表はし、之に對して「聲音の休止」を表はす所の記號が「休止符」といふものであります。それ故、「休止符」はまた「黙符」とも云ひます。

「休止符」も亦、「單純休止符」と「附點休止符」の二つに大別します。

第一節 單純休止符

普通用ゐられる「單純休止符」は、六種あります。次の表に、「音符」と對照して其歷時を明かにします。

休止符
黙符

單純
休止符

形状	名稱	音符との比較
—	全 休 止 符	— = 〇
—	二 分 休 止 符	— = ρ
↘↘	四 分 休 止 符	↘ = ρ
↘↘	八 分 休 止 符	↘ = ρ
↘↘	十 六 分 休 止 符	↘ = ρ
↘↘	三 十 二 分 休 止 符	↘ = ρ

第二節 附點休止符

「附點休止符」の「點」はその價值、その形式、凡て「音符」の場合と同じ事で通用されるものは、次の五種であります。

形状	名稱	音符との比較
—.	附點全休止符	—. = 〇.
—.	附點二分休止符	—. = ρ.
↘.	附點四分休止符	↘. = ρ.
↘.	附點八分休止符	↘. = ρ.
↘.	附點十六分休止符	↘. = ρ.

附 點
休 止 符

理論上から云ふと、「複附點休止符」も成立する譯であります。普通には、あまり用ゐません。

第四章 音 名

音名は、普通「アルファベット」の初めの七文字又は「イロハ」の初めの七文字を用ゐます。之を有鍵樂器の「鍵盤」と對照しますと、次の様であります。



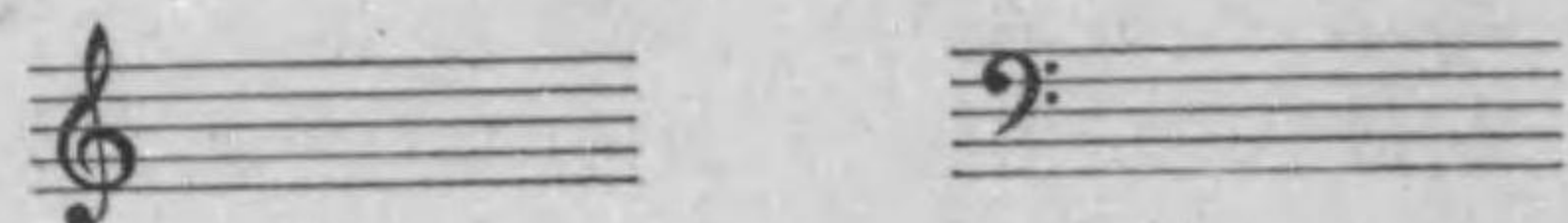
日 本	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	イ	ロ
英, 米	c スイー	d デー	e イー	f エフ	g ゲー	a エー	b ビー
佛, 伊, 露	do ド	re レ	mi ミ	fa ファ	sol ソル	la ラ	si スイ
獨, 埃	c ツエー	d デー	e エー	f エフ	g ゲー	a ア	h ハー

第五章 音部記號

「音部記號」は「譜表」上にある「音名」の位置を定めるための記號で、普通「譜表」の左端に附せられます。

音 名
鍵 盤

音部記號



普通に用ゐる音部記號は、 女聲音部記號、 の男聲音部記號の二種であります。

第一節 女聲音部記號

女聲音部記號は又高音部記號とも云ひ、譜表上の第二線を渦をもつて圍み、その線上が、ト音の位置であることを示します。之を、普通ト字記號とも云ひます。

女聲音部記號はまた之をソプラノ記號(所謂高音部記號)とも、ヴァイオリン記號とも云ひます。

ト字記號の附せられた譜表を女聲音部譜表又は高音部譜表とも云ひます。



女聲音部記號
高音部記號

ト字記號

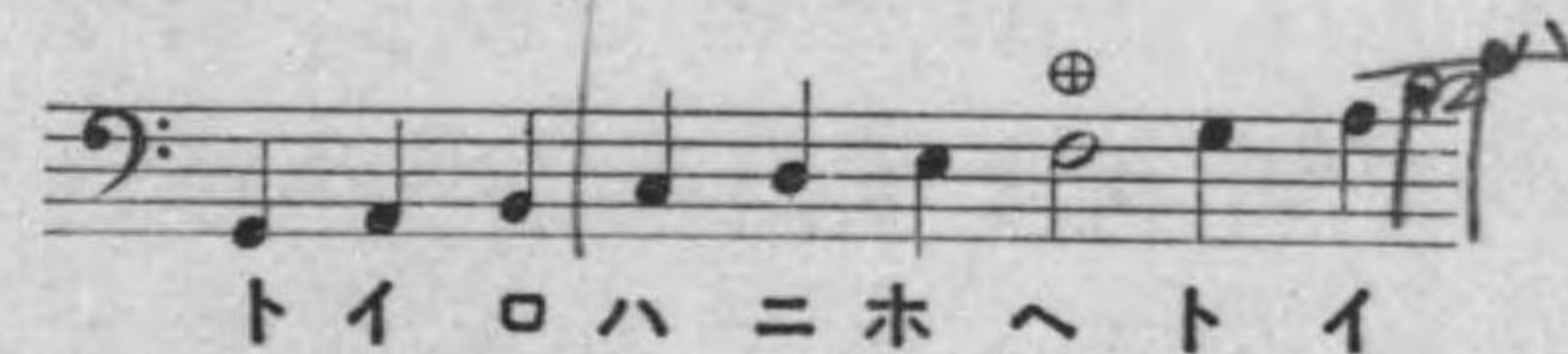
ソプラノ記號
ヴァイオリン記號

女聲音部譜表
高音部譜表

第二節 男聲音部記號

男聲音部記號は又低音部記號とも云ひ、譜表上の第四線を渦で圍み、右傍に二つの黒點を附けたもので、その線上がヘ音の位置に當ることを示します。之を普通ヘ字記號とも云ひます。

男聲音部記號は又バツソ記號(所謂低音部記號)とも云ひます。



ヘ字記號の附せられた譜表は、男聲音部譜表又は低音部譜表とも云ひます。

第六章 拍子と小節

鳥の飛ぶのを見ても、短艇の行くのを見ても、或は馬の駈けるのを見ても、人の歩行などを見ても、それぞ

男聲音部記號
低音部記號

ヘ字記號

バツソ記號

男聲音部譜表
低音部譜表

れ、その運動の「軽」「重」を見る事が出来ませう。一つのもの「進む」と云ふ事又は「動く」と云ふ事は、其「軽」「重」の規則的反覆に外なりません。音楽に於ては、此「軽」「重」の規則的反覆を、「拍子」と云ふのであります。

人の歩行や、短艇の漕航や、鳥の飛翔等は、その運動を起す點が、いづれも、「重」「軽」の二つからなつて居るので、斯う云ふ運動を稱して、「二拍子」と云ふのであります。

併鍛冶屋の職工が臺を圍み乍ら、三人で一枚の鐵塊を鍛へて居る時の様に、順次に規則的の運動を續ける場合に起る韻律は、「重」「軽」「軽」の三つとなるのであります。斯う云ふ運動を名づけて「三拍子」と云ひます。

「重」「軽」と云ふ言葉の代りに、音楽上にては、通例「強」「弱」の語を用ゐて居ります。で、これより後は、悉く「強」「弱」の語を用ゐることにします。

「強」「弱」の位置が、よくわかる様に、「譜表」を垂直の線に依つて切斷し、その線の右に來た音を「強聲部」、その他を「弱聲部」と云ひます。そして、此の垂直線は「縦線」と呼ばれてゐます。

また、樂曲の「終結」や「段落」を示す場合には、二本の「縦線」を用ゐます。之を「複縦線」と云ひます。そして「縦線」と「縦線」の間を「小節」と云ひます。

「終結」の時に用ゐる「複縦線」は細太の二線を用ゐ、
「段落」の時には二本の細線を用ゐることが、普通となつて居りますが、必ずしも其通りでなくとも別に差支はありません。

音楽上の「拍子」は、普通、「二拍子」か、「三拍子」か、又はその重複せられた「四拍子」か、「六拍子」かに過ぎません。

「拍子記號」は分數のやうに、「アラビヤ數字」を以て表はし、樂曲の初めの「音部記號」の次に記載します。

「拍子記號」の分數式の分母は、その曲の

強聲部
弱聲部
縦線

複縦線

拍子記號

拍 數

「一拍」に數ふべき「音符」の性質を表はし、分子は「一小節」中に含まれる「拍數」を示すものであります。

小節 小節 小節 小節

拍子記號 單縦線 單縦線 單縦線 複縦線

第一節 二拍子

「二拍」を以て、「一小節」を形作つて居るものを「二拍子」と云ひます。そして、その「第一拍」は「強聲部」で、「第二拍」は「弱聲部」であります。

抑聲部 揚聲部

「強聲部」、「弱聲部」のことを、「抑聲部」、「揚聲部」と云ふ事もあります。

「二拍子」には、普通「二分の二拍子」と、「四分の二拍子」との二種あります。

「二分の二拍子」は $\frac{2}{2}$ の代りに、 C の記號を用ゐることがあります。

アッラ エ

C の記號は (Alla breve) と云はれて居ります。

強聲 弱聲 強聲 弱聲 強聲 弱聲 強聲

二分ノ二拍子

強聲 弱聲 強聲 弱聲 強聲 弱聲 強聲

四分ノ二拍子

第二節 四拍子

「四拍」を以て、「一小節」を形作つて居るものを、「四拍子」と云ひます。そして、その「第一拍」は「強聲部」、「第三拍」は「次強聲部」で、「第二拍」と「第四拍」は「弱聲部」であります。

四拍子

「四拍子」には、普通「四分の四拍子」と「八分の四拍子」との二種あります。

四分の四拍子には、 $\frac{4}{4}$ の代りに、 C の記號を用ゐることがあります。

四拍子の四分の四拍子

八拍子の八分の四拍子

C の記號は半圓(より轉化したのです。昔ギリシアでは拍子を完全と不完全とに分ち、完全拍子を全圓 O で示し、不完全を半圓 C で示したのですが、 $\frac{3}{4}$ 拍子はギリシア人の所謂不完全拍子に當る所から遂に誤つて C を C と記すようになったのです。

強弱次弱 強弱次
聲聲聲聲 聲聲聲

四分ノ四拍子

八分ノ四拍子

強弱次弱 強弱次
聲聲聲聲 聲聲聲

第三節 三拍子

三拍子

「三拍」を以て、「一小節」を形作つて居るものを「三拍子」と云ひます。そして、その「第一拍」は「強聲部」で、「第二拍」と「第三拍」は「弱聲部」であります。

四分の三拍子
八分の三拍子

「三拍子」には、普通、「四分の三拍子」と「八分の三拍子」の二種あります。

強弱弱 強弱弱 強 強

四分ノ三拍子

強弱弱 強弱弱 強 弱 強

八分ノ三拍子

第四節 六拍子

六拍子

「六拍」を以て、「一小節」を形作つて居

るものを「六拍子」と云ひます。そして、その「第一拍」は「強聲部」、「第四拍」は「次強聲部」で、その他の各拍は凡て「弱聲部」であります。

「六拍子」には、普通、「八分の六拍子」と「四分の六拍子」の二種あります。

八分の六拍子
四分の六拍子

強弱弱 次弱弱
聲聲聲 強聲聲

八分の六拍子

強弱弱 次弱弱
聲聲聲 強聲聲

四分の六拍子

第五節 不完小節

樂曲に依つては、「弱聲部」から、その運動を起すものがあります。此場合には、樂曲の最初の「小節」と、最終の「小節」を合はせて、「一小節」に數へます。斯う云ふ「小節」を「不完小節」と云ひます。

不完小節

「不完小節」は、また「變格小節」或は「不備小節」とも云ひます。

變格小節
不備小節

完全小節
正格小節

「不完小節」に對して、正しく拍子の一の「強聲部」から起つて居るものを、「完全小節」又は「正格小節」とも云ひます。



第六節 變・拍・子

變拍子

「變拍子」は、偶數を奇數で割る場合に生ずるもので、臨時に起つて來るものであります。そうして、それを譜面上に表はす場合に最も多く起る「變拍子」は、「四分音符」三個を「二分音符」一個の價値に割當てるものこ、「八分音符」三個を「四分音符」一個の價値に割當てるものこの二つであります。

「變拍子」を表はすには、その三つの「音符」の上又は下に「3」を附して、それを「弧線」を以て連結して、普通の「音符」と區別します。之を「三連音」と云ひます。

三連音

「三連音」からなる「四分の二拍子」の一部は、實際に於ては、「八分の六拍子」と等しい運動を持つ事になります。



第七節 切分音

切分音

「切分音」は、やはり「變拍子」と同じく、臨時に起るものです。例へば、「弱聲部」にある一音が、「強聲部」まで（「三拍子」の場合は「弱聲部」まで）延長した場合を云ひます。「強聲部」まで延長した場合には、その「強聲部」又は「次強聲部」の「抑音」は、前の「弱聲部」に繰り上げられます。「三拍子」の三拍目のやうな「弱聲部」まで延長した場合には、實に新たな、軽い「抑音」を生じます。



第八節 拍法或は指揮法

拍法

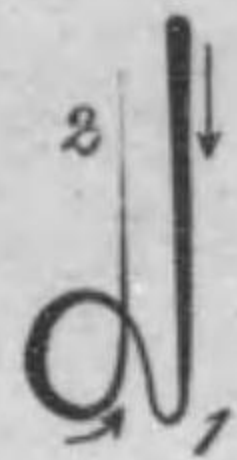
合唱や合奏の統一を計るためには、**拍法**が必要であります。

拍法とは、楽曲の心を指揮棒を通じて、右腕の運動に依つて表はすことを云ひます。

右腕の運動を圖に依つて示しますと、次の様になります。

拍法は、人々によつて幾分の相違は免がれませんが、拍子の**一の強聲部**は何拍子に限らず、必ず上より下に振ることは、一般に極つて居ります。

二拍子



四拍子



三拍子



六拍子



第七章 變化記號

樂音の高さを變化せしめる記號を**變化記號**と云ひます。この記號は、常に**音符**の左側の、同じ**度**の上に附せられます。

變化記號

變化記號の効力は、**一小節**内に限られます。

第一節 嬰記號

樂音の高度を、**半音程**高める記號

嬰記號

「#」を「嬰記號」と云ひます。

重嬰記號

「嬰音」を更に「半音程」高める場合には「X」を用ゐます。之を「重嬰記號」と云ひます。



第二節 變記號

變記號

樂音の高度を「半音程」低める記號「b」を「變記號」と云ひます。

重變記號

「變音」を更に「半音程」低める場合には「bb」を用ゐます。之を「重變記號」と云ひます。



第三節 復位記號

「嬰」, 「變」または「重嬰」, 「重變」に依つて變化せられた音を元の高度に復

復位記號

本位記號

歸せしめる記號「 \natural 」を「復位記號」又は「本位記號」とも云ひます。

「重嬰音」や「重變音」を「嬰音」や「變音」に復歸せしめる場合には、從來、一個の「復位記號」に「嬰」や「變」を併用しましたが、記譜上の手数を省くために、近頃は、唯單に、一個だけの「嬰」や「變」を用ゐる様になりました。

「重嬰音」や「重變音」を「普通音」に復歸せしめる場合には、何れも「 \natural 」を「重復位記號」を用ゐます。

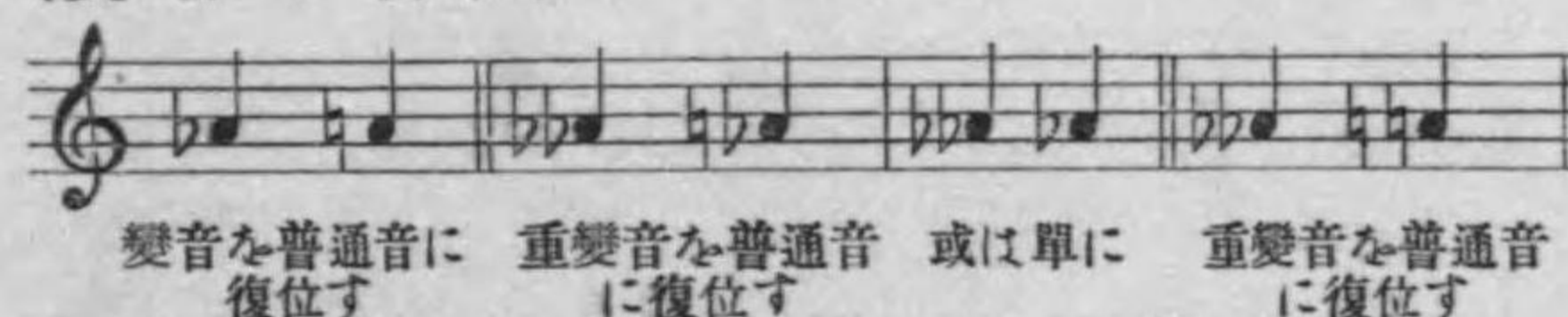
重復位記號

(嬰音の復位)



嬰音を普通音に復位す 重嬰音を嬰音に復位す 或は單に 重嬰音を普通音に復位す

(變音の復位)



變音を普通音に復位す 重變音を普通音に復位す 或は單に 重變音を普通音に復位す

第八章 速度に関する標語

一樂曲の「速度」を示す語を、「速度標語」と云ひます。

速度標語

「速度標語」は従来、次に列記した「例」の様に、伊太利語を以て表はして居りましたが、近來は作曲者が、各自の國語を以て表はす場合が多くなつて來ました。

「速度標語」は、恰度、汽車の線路に沿ふて所々に立てられてある、速力を示す標柱の様なものです。随つて、樂曲の進行中に、速度の變更を示すやうな場合も起つて來ますが、普通の樂曲に於ては、唯、樂曲の首部に記載して、總体の速度を示すことになつてゐます。

第一節 樂曲の全体を 支配する標語

(標語)	(譯意)
レント Lento	のびやかに、ゆるく。
ラルゴ Largo	ゆるく、はばひろに。
ラルゲット Larghetto	ラルゴより心持速く。
アダージョ Adagio	ゆるやかに。
アンダンテ Andante	ゆるく歩むやうに。
アンダンティノ Andantino	アンダンテより少し速く。

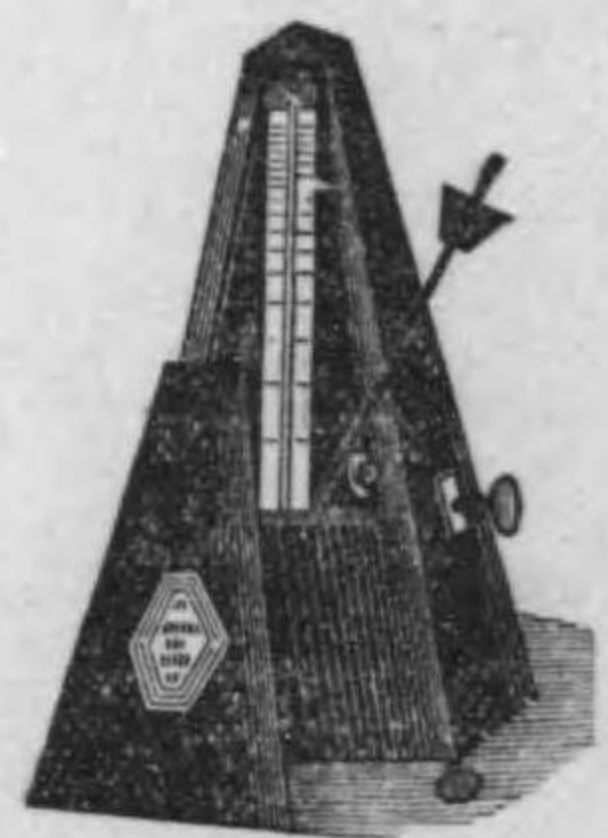
モデラート Moderato	程よき速さに。
アレグロ Allegro	活潑に、迅速に。
アレゲレット Allegretto	輕やかに。
プレスト Presto	急速に。
プレステイシモ Prestissimo	極めて急速に。

第二節 樂曲の一部を 支配する標語

(標語)	(略語)	(譯意)
リタルダンド Ritardando,	Ritard. Rit.	段々と遅く。
リテヌート Ritenuto,	Riten.	……ためらふ様に。
ラレンタンド Rallentando,	Rall.	
アツチェレランド Accelerando,	Accel.	せき込む様に。
アド リビトゥム Ad libitum,	Ad lib.	任意に。
ア テンポ A tempo		元の速度に。
カランド Calando		段々とゆるやかに弱く。
ポ コ Poco		少しく。
モルト Molto		甚しく。

一楽曲の「速度」を唯單に、「速く」か、「遅く」か云ふ語で表はしても、充分に正確な「速度」を知ることが出来ませんから、「拍節機」と云ふ器械を用ゐて、その正確な「速度」を定めます。

楽曲の首部に ♩=100 とか ♩=60 など記載されてあるのが、それでありませぬ。その「音符」は「一拍」を示すもので、數字はその「一拍の速度」を示すものであります。例へば ♩=100 とは一分間に四分音符を百回奏する速さを示したのです。



「拍節機」の面に記載してある「速度標語」は、實際と照らし合はせて、決して絶対に

信頼すべきものではありません。例へば、あなた方が、「アンダンテ」と書いてある一曲を取つて、「拍節機」面の「アンダンテ」の最も遅い「126」を一拍として、御覽なさい。果して「拍節機」が與へて呉れる、その速度で「アンダンテ」の氣持が出て來ませうか。

それ故、楽曲の首部に、「音符」と「數字」とで、「拍節機」の速度を示してある時の外、初學者は、却て「拍節機」を頼らない方が安全であります。

第九章 發想に関する標語と記號

第一節 強弱に関する發想記號

一楽曲中の、「強」、「弱」または曲想を示す語を「發想標語」と云ひ、記號を「發想記號」と云ひます。

(標語) (略語及び記號) (譯意)

ピアノ
Piano.....*p*.....弱く。

ピアノニッシイモ
Pianissimo.....*pp*.....更に弱く。

メッツオ ピアノ
Mezzo piano .. *mp*.....稍弱く。

- フォルテ
Forte.....*f*.....強く。
- フォルテ イツシモ
Fortissimo.....*ff*.....更に強く。
- メッツォ フォールテ
Mezzo Forte.....*mf*.....稍強く。
- クレシエンドー
Crescendo.....*cresc.* <...段々に強く。
- デクレシエンドー
Decrescendo.....*decresc.* } >...段々に弱く。
- ディミヌエンド
Diminuendo.....*dim.* }
- アツェント
Accento.....*ac.* >.....抑わる様に。
- スレオルツアンド
Sforzando.....*sf.*.....鋭く。

第二節 曲想に關する
發想記號

- | (標語) | (譯意) |
|--------------------------|-------------|
| アヂト
Agitato, | }急いで。 |
| アニマト
Animato, | |
| カンタービレ
Cantabile..... | 唱ふ様に。 |
| コン モート
Con moto..... | 動搖して。 |
| ドルチェ
Dolce..... | 優しく、靜かに。 |
| フリオーソ
Furioso..... | 荒々しく。怒るやうに。 |

- グラツイオーソ
Grazioso.....^{しこ}雅やかに。
- レガート
Legato.....滑らかに。
- レッチェーロ
Leggiero.....軽く、自由に。
- マエストーソ
Maestoso.....莊嚴に、莊麗に。
- パッションナート
Passionato.....熱情的に。
- スケルツアンド
Scherzando.....冗談の様に。
- ソステヌート
Sostenuto }支へる様に。
- テヌート
Tenuto }
- トゥッタ ラ フォルツア
Tutta la forza.....全力を以て。

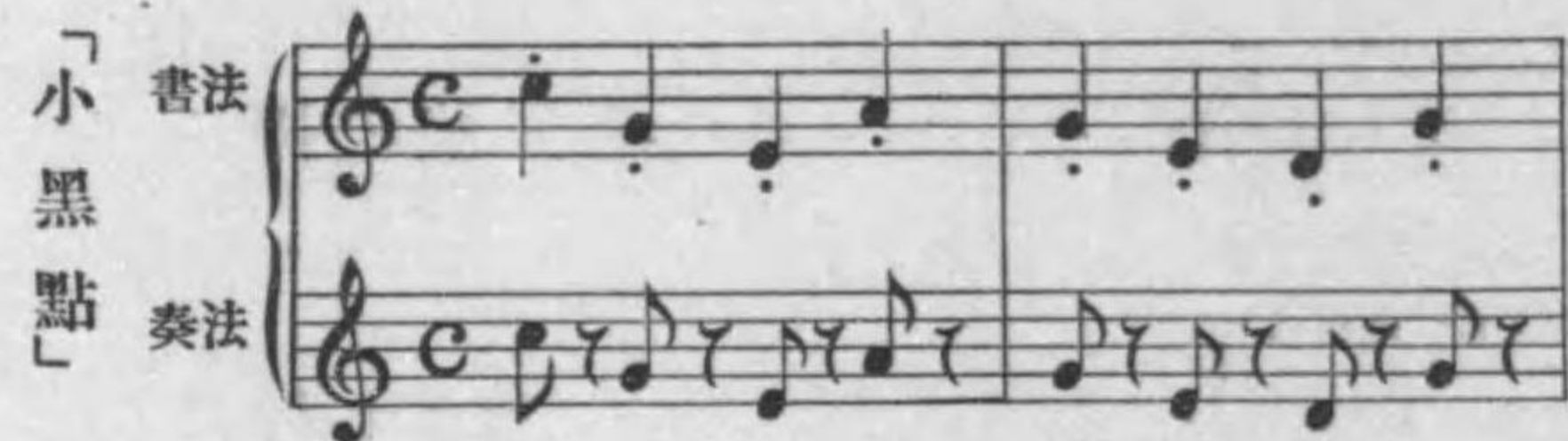
第十章 雜記號

前章の「發想記號」の他に、尙、曲趣を明白にするために、奏法上の記號が用ゐられます。これ等の諸記號は總括して、「雜記號」と云ふ名のもとに、普通一般に説くことになつて居ります。

第一節 小黑點と垂點

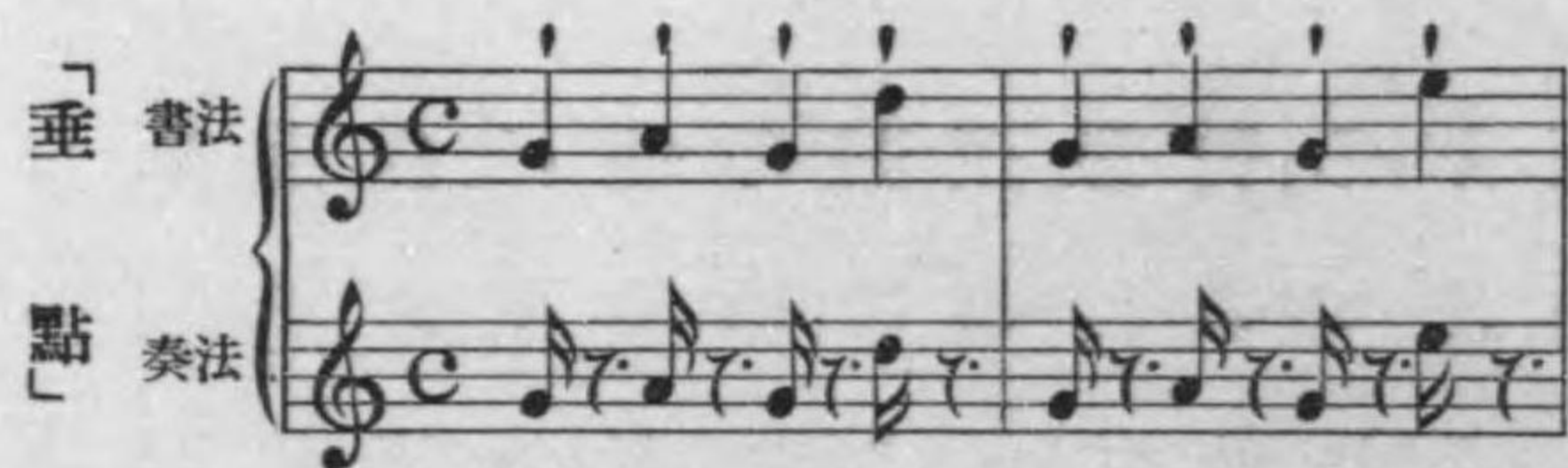
樂曲中の或音符を、斷片的に奏させるために、音符の上、または下に、^レを附する事があります。之を「**小黑點**」と云ひます。

小黑點



「**小黑點**」より一層明確に、極めて鋭く奏させるために、音符の上、または下に、^ヽを附する事があります。之を「**垂點**」と云ひます。

垂點



第二節 連結記號と結合記號

樂曲中の或部分を滑らかに奏さ

せるために、^レを以て數個の「**音符**」を繋ぐ事があります。之を「**連結線**」又は「**連結記號**」とも云ひます。

連結線
連結記號

連續記號



高さの等しい、二つの「**音符**」を^レを以て繋いだ時には、之を「**結合線**」又は「**結合記號**」とも云ひます。この場合の「**音符**」はその價值を合せて、「**一音符**」の様に奏するのであります。

結合線
結合記號

連結記號



第三節 停滯記號延長記號

樂曲中の或「**音符**」や「**休止符**」を停滯させるために、「**音符**」や「**休止符**」の上、又

停滯記號

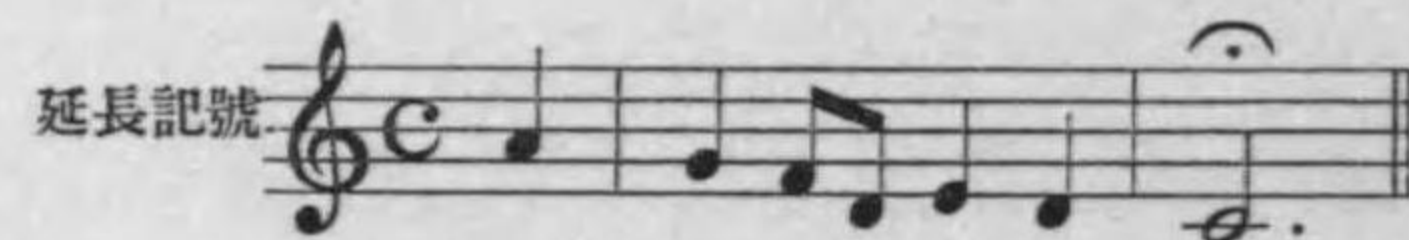
は下に、 \frown を附けることがあります。之を「停滯記號」と云ひます。

「停滯記號」の附せられた「音符」や「休止符」は、その元價を二倍、若くは三倍の長さを保つ事になります。例へば、次の例に於いて「停滯記號」の附せられた、「附點四分音符」は、恰も $\text{♪} \times \text{♪} = \text{♪}$ の如く奏すべきものであります。



時には、樂曲中の「終結」や「段落」にある「音符」や「休止符」又は「複縱線」の上、或は下に、 \frown を附せられる事があります。斯う云ふ場合には之を「延長記號」と云ひます。その延長の度合は、樂曲の性質に依つて、それぞれ違ひがあります。

延長記號



(併用の一例停滯延長)



省略記號

第十一章 略記法

樂曲中、同一の部分を繰返す時や、又は記譜上の手数を省くために、用ゐる記號を稱して、「省略記號」と云ひます。

「省略記號」には、「小節」に關するものと、「音符」に關するものとの二種あります。

第一節 小節に關する略記法

(甲) 前後の兩部分を繰返す場合。



(乙) 或「段落」から戻つて、其中途から他の部分に移る場合。



(丙) 「終局」から始めに戻つて「Fine」に終る場合。



D.C. は伊太利語の「Da Capo」の略で、「Da」は「より」、「Capo」は「首め」と云ふ意味であります。

(丁) 一楽曲の或部分から或點に戻つて、其曲の途中で終結する場合。



第二節 音符に関する略記法



第三節 休止符に関する略記法



第十二章 裝飾音

「旋律」の「流れ」に附隨して起る、偶發的な音の「現象」があります。之を普通、裝飾音と呼んで居ります。

「裝飾音」は、「流れ」の泡沫に現はれる「虹」や、奔流に起る「渦」の様なものであります。それで、「裝飾音」の性質は、決して加工的のものではなく、極めて自然的のものであります。作曲者は、決して「旋律」の面に白粉をぬつたり、紅をさしたりするやうなつもりで、「裝飾音」を用ゐるべきものではありません。

普通、現はれる「裝飾音」には、「倚音」、「回音」、「顛音」、「漣音」、「琵琶音」の五つがあります。

第一節 倚音

「倚音」には、「長」「短」の二種あります。小さい「音符」のものを「長倚音」と云ひ、小さい「音符」の「符尾」に「斜線」を加へられたものを「短倚音」と云ひます。

裝飾音

倚音

長倚音

短倚音

(書法) (奏法)

〔長倚音〕

(書法) (奏法)

〔短倚音〕

第二節 回音

回音

〔回音〕は、音の廻ぐる場合を云ふもので、∞の記號にて表はします。

(書法) (奏法)

〔回音〕

〔回音記號〕の下に〔嬰〕、又は下に〔變〕の附けられた時は、次の如く奏します。

(書法) (奏法)

(書法) (奏法)

〔回音記號〕の上・下に同時に〔嬰〕〔變〕が附せられた時は、次の如くに奏します。

(書法) (奏法)

二つの〔音符〕の中間に、〔回音記號〕の附せられた時は、次の如くに奏します。

(書法) (奏法)

第三節 顫音

顫音

〔顫音〕は、trの記號を以て表はします。その奏法は次の通りです。

(書法) (奏法)

〔顫音〕

連音

第四節 連音

「連音」は「M」或は「W」の記號に依つて、表はします。



「連音」は、もと「ピアノ」の前身とも云はれる「スピネット」の「鍵盤」を、恰度「琴」や「ヴァイオリン」の「絃」を指で振はす様に、振はす時に用ゐられる記號ですが、現今の「ピアノ」の構造では、たとひ、如何様に激しく「鍵盤」を振はせても、音に何等の著しい變化を與ふることが出来ませんので、全く「音程」を、はつきりと「二度」に分けて、奏する様になりました。

第五節 琵琶音

琵琶音

「琵琶音」は二個以上の相重なつた「音」に用ゐられるもので、普通、「音符」の左側に波線を附して表はします。

音程

全音階的音程



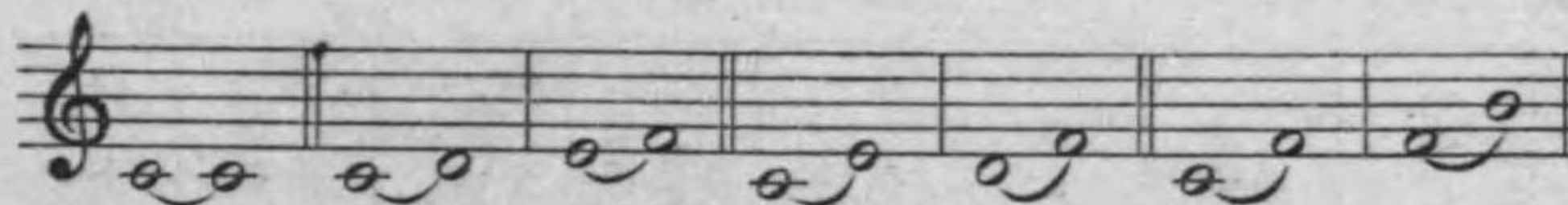
第十三章 音程論

或「一つの音」と、或他の「一つの音」の間の高さの間隔を「音程」と云ひます。

「音程」は、「全音階的音程」と「半音階的音程」の二種に大別します。

第一節 全音階的音程

「全音階的音程」とは、「全音階」中の、各二つの音の隔たりを云ひます。



名	完全一度	長二度	短二度	長三度	短三度	完全四度	増四度
稱	同	一全音	一半音	二全音	一全音と一半音	二全音と一半音	三全音
音の幅	度	度	度	度	度	度	度



名稱	完全五度	減五度	長六度	短六度	長七度	短七度	完全八度
音の幅	三全音と一全音の半音	二全音と二全音の半音	四全音と一全音の半音	三全音と二全音の半音	五全音と一全音の半音	四全音と二全音の半音	五全音と二全音の半音

第二節 半音階的音程

半音階的音程

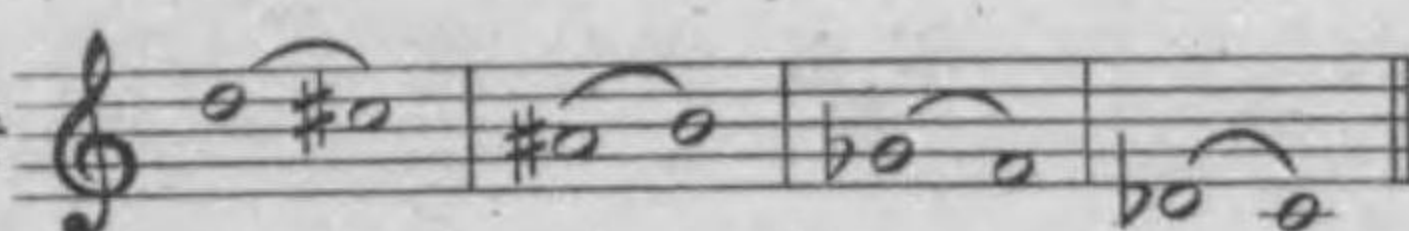
「半音階的音程」は、「全音階的音程」に「嬰」「變」の記號を用ゐて、「半音程」を増減したものを云ひます。

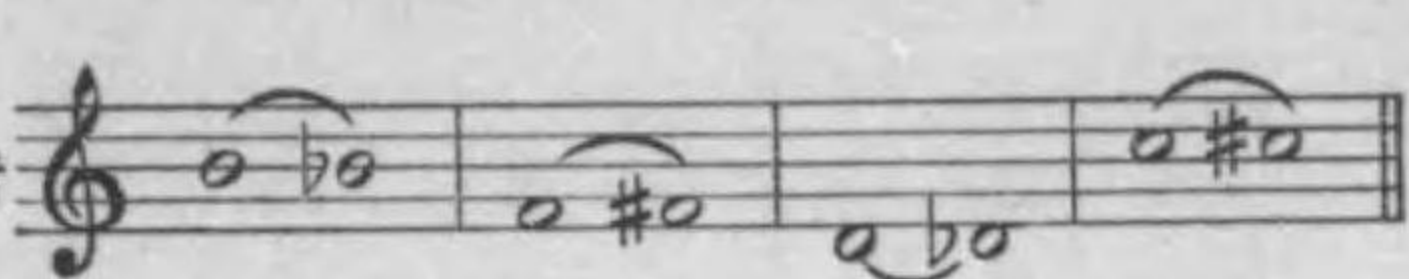


名稱	増一度	増二度	減三度	減四度	増五度	増六度	減七度	減八度
音の幅	一全音階的半音	一全音階的半音と一全音	二全音階的半音	一全音階的半音と二全音	三全音階的半音と一全音	四全音階的半音と一全音	四全音階的半音と二全音	四全音階的半音と三全音

全音階的半音
半音階的半音

随つて、「二度」に亘る「半音程」を、「全音階的半音」と云ひ、同度に起る半音を、「半音階的半音」と云ひます。

全音階的半音 

半音階的半音 

第三節 協和音程と不協和音程

二つの音を、同時に奏する時に、その響の融合するものを、「協和音程」と云ひ、その響の融合しないものを、「不協和音程」と云ひます。

協和音程
不協和音程

「協和音程」には、「完全」と「不完全」の二種あります。

協和音程

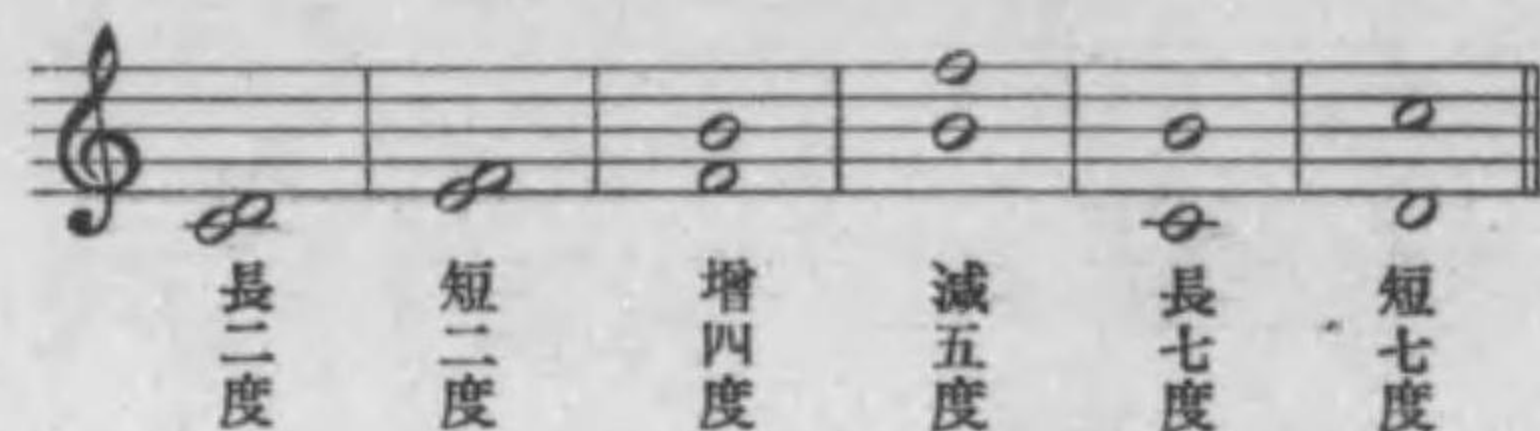
完全協和音程 不完全協和音程



完全一度 完全四度 完全五度 完全八度 長三度 短三度 長六度 短六度

上圖に示した、八種の「協和音程」以外の音程を、「不協和音程」と云ひます。

不協和音程



この他、半音階的音程の全部。

第四節 音程の轉回

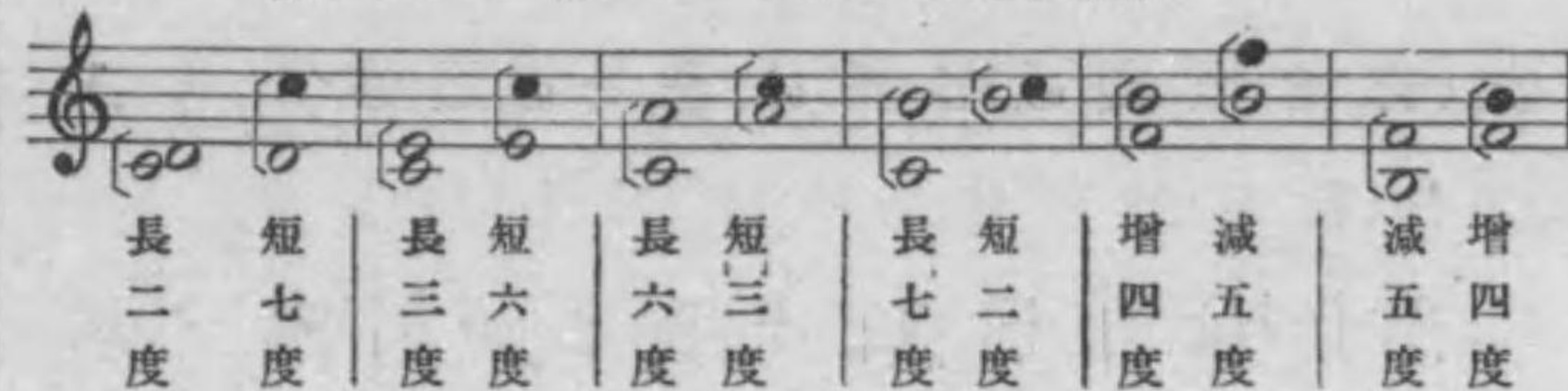
二つの重つた音の下の音を、八度上方に移したり、上の音を八度下方に移す等の事を、音の轉回と云ひ、その音程を轉回音程と云ひます。

轉回音程



音程は轉回される事に依つて、長は短に、短は長に、増は減に、減は増に變ります。

(轉回に依つて起る變質)



轉回しても性質の變らない音程を完全音程と云ひます。

第十四章 音階と三和音

或音を基礎として、一定の規約の下に配列せられた音の段階を、音階と云ひます。今日西洋で最も多く用ひられる音階は、八つの音から成立つて居ります。

音階

音階の基礎となる第一音を主調音又は主音と名づけ、主調音の音名を以て、音階の名とします。

主調音

主音

音階を唱ふるには、階名を用ゐます。階名には、次の三種あります。

階名

(日本)	ヒ	フ	ミ	ヨ	イ	ハ	ナ	ヒ
(米國)	Doh	Rey	Mi	Fah	Soh	Lah	Te	Doh
(歐洲)	Do	Re	Mi	Fa	Sol	La	Si	Do

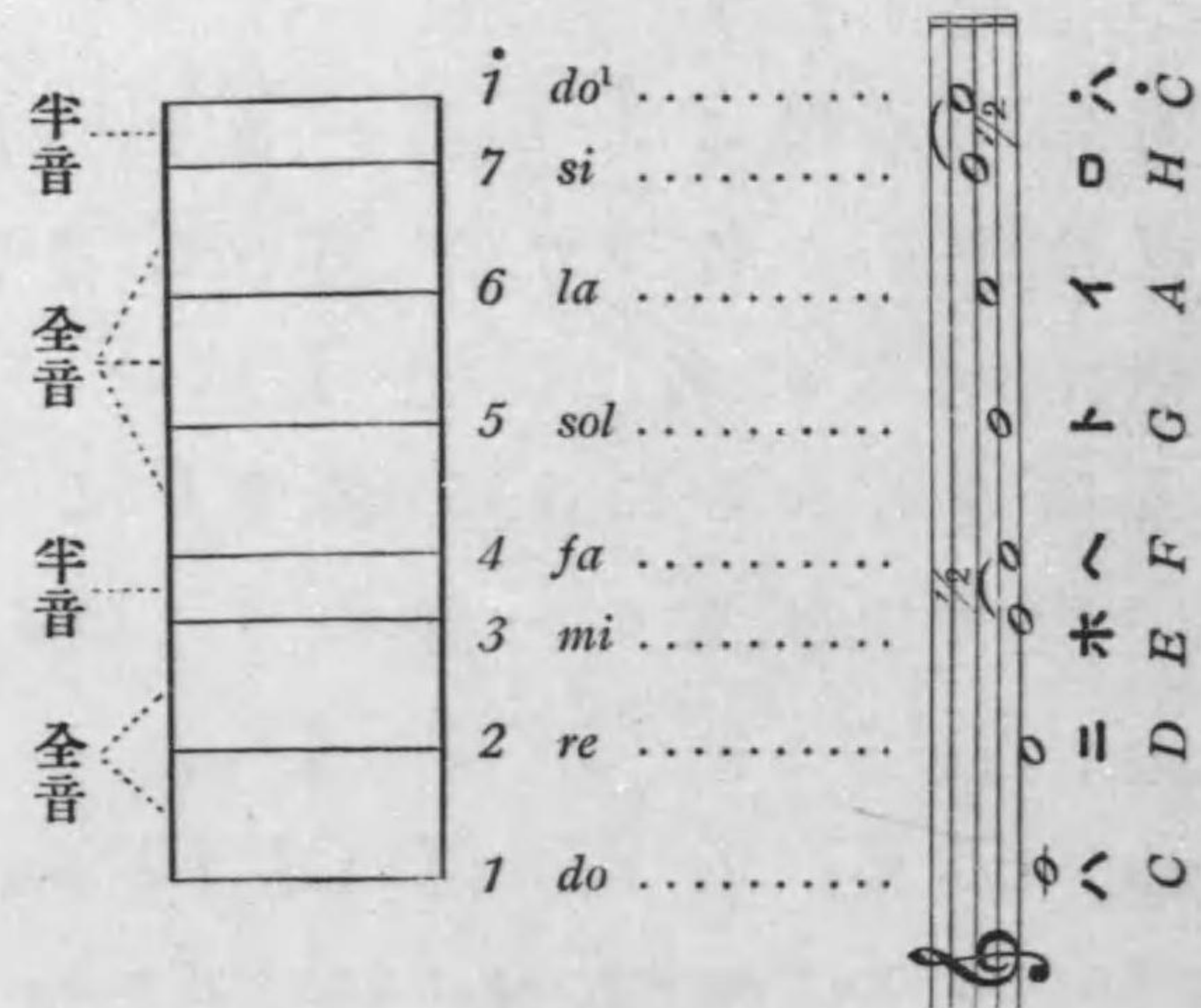
「歐米」で用ゐられる「階名」は、古い祈禱歌の、(約翰の讚歌)各語の、初めの綴字から採つたものが變化したのであります。

「音階」は普通、「長音階」と「短音階」の二つに大別されて居ります。

第一節 長音階

長音階

「長音階」とは、その「第三音」と「第四音」、「第七音」と「第八音」の音の音程が、「半音」で、その他の各音の音程が「全音」である所の「音階」を云ひます。

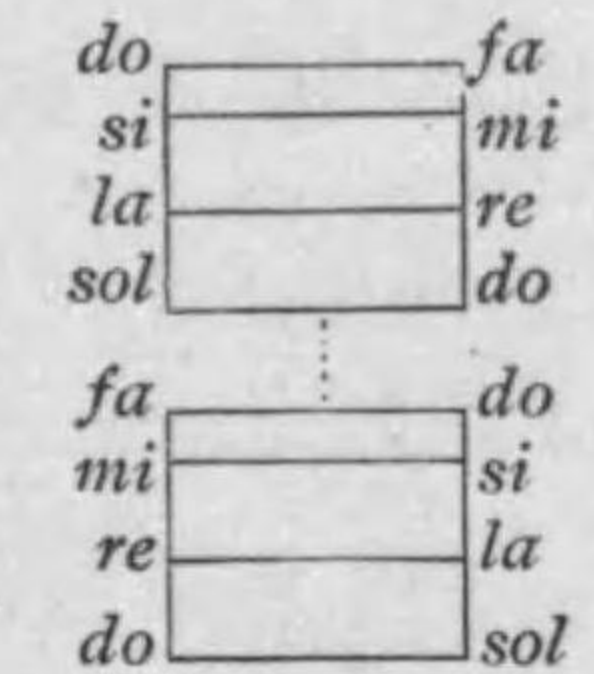


それ故、「長音階」は、五つの「全音」と、二つの「半音」から成立つて居ります。

「音階」は音の巾を度る物指の様なもので、非常に大切なものでありますから、極めて正確に修得しなければなりません。

「音階」に就いての觀念を明らかにするために、茲に、「長音階」を解剖して見ませう。

右圖に示した通り、「長音階」は「二全音」と「一半音」が、成立する縦の一系列の上に、「一全音」の間隔を置



いて、更に、「二全音」と「一半音」から成立する音の一系列を重ねたものであることが分りませう。随つて、「ド、レ、ミ、ファ」は、「ソ、ラ、スイ、ド」と全く等しい音の關係を持つて居ると云ふ事も明らかに分りませう。

「一音階」の、「ド、レ、ミ、ファ」を「前半列」と云ひ、「ソ、ラ、スイ、ド」を「後半列」と云ひます。

前半列
後半列

「音階」の如何なる音の上にも、その音を基礎として、「嬰」「變」の力を借りて、

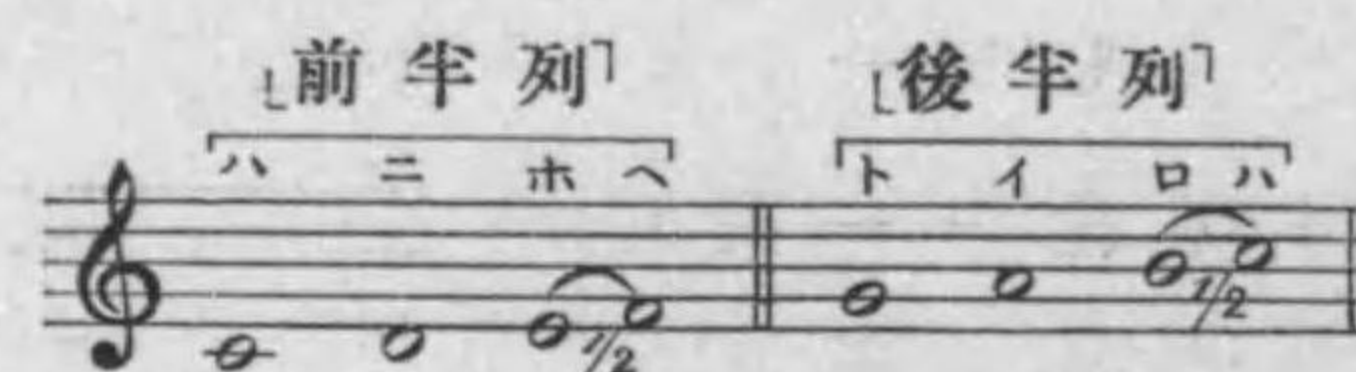
長旋法

嬰種長階

「音階」を構成することが出来ます。
「長音階」に依つて成り立つ楽曲を、
「長旋法」と云ひます。

(一) 嬰種長音階の構成法

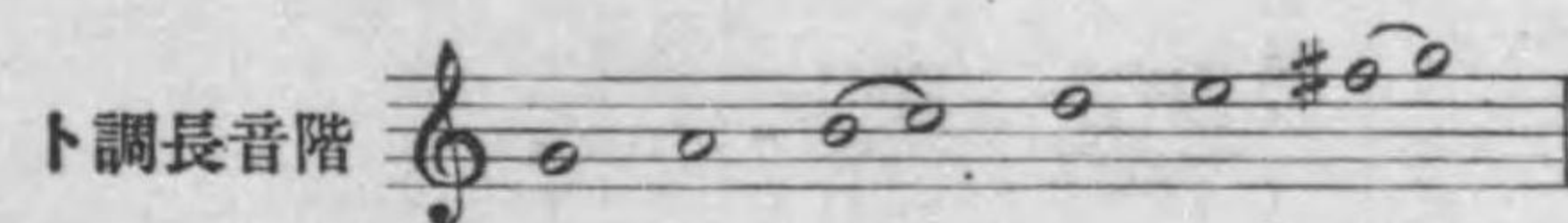
前に述べた様に、一つの「長音階」は、
「前半列」と「後半列」の二つの部分に
分ける事が出来ます。



して見れば、「ハ調長音階」の「後半列」
である「ト、イ、ロ、ハ」を土臺として、その
上に、全音の間隔を置いて、更に「二全
音」と「一半音」から成る音一列を重ね
る事が出来るわけです。



前圖の通り、斯うして構成せられ
た「音階」の「後半列」を見るに、その「第三
音」と「第四音」が「全音程」で、「第二音」と
「第三音」が「半音程」であるために、之
を「前半列」と全く等しい音の關係と
するには、どうしても、「嬰」の力を借ら
なければなりません。



即ち、「第三音」に「嬰」を附けて、「第三音」
と「第四音」の間を「半音」にして、「第
二音」と「第三音」の間を「全音」にして、
「前半列」と全く等しい音の關係に直
す事が出来ます。

斯うして、理論上は、「嬰」を用ゐて、限
りなく「音階」を作る事が出来る譯で
ありますが、普通、「嬰種長音階」では、次
の七種を用ゐて居ります。

嬰種長音階構成表

ハ調長音階

ト調長音階

ニ調長音階

ホ調長音階

嬰ハ調長音階

嬰ヘ調長音階

嬰ニ調長音階

嬰ハ調長音階

(二) 變種長音階の構成法

「ハ調長音階」の「前半列」を、或「音階」の「後半列」として、一つの「音階」を構成する場合には、是非、「變」の力を借らなければなりません。

ハニホヘトイロハ

ハニホヘトイロハ

上圖の通り、「ハ調長音階」の「前半列」を或「音階」の「後半列」として、下方に、「一全音」を隔てて、「後半列」と等しい音の關係を持つた「四つの音の一系列」を作る場合に、「變」を以て、「前半列」の「第三音」と「第四音」との間を「半音」に變ふれば、茲に一の新しい「音階」が生れて來ます。この方法に依つて、「變種長音階」も「嬰種長音階」と同じ様に、普通、次の七種の音階を構成する事が出來ます。

變種長音階構成表

第二節 三和音

「三和音」とは、互に「三度」の間隔を保つて、相重ねられた、「三つの音」の相和を云ひます。

一つの「三和音」は、「基音」「第三音」「第五音」から成り立つて居ります。

「三和音」の性質は、その「第三音」と「第五音」に起因します。

「長音階」の各音を土臺として、三和音を築く時は、三様の異つた性質の「三和音」を得ます。

(一) 「長三和音」 (長三度と完全五度)

三和音

基音 第三音 第五音

三和音の性質

(二) 短三和音 (短三度と完全五度)



(三) 減三和音 (短三度と減五度)



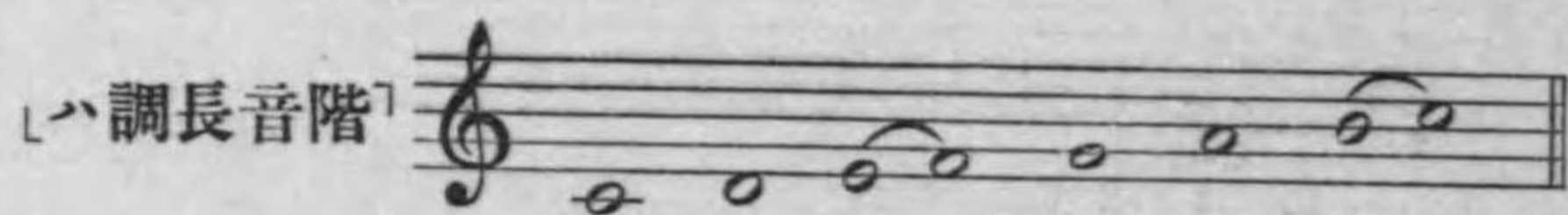
長三和音

短三和音

減三和音

即ち、長音階の一度、四度、または、五度に築かれた三和音を長三和音と云ひ、二度、三度または、六度に築かれた三和音を短三和音と云ひ、七度に築かれた三和音を減三和音と云ひます。

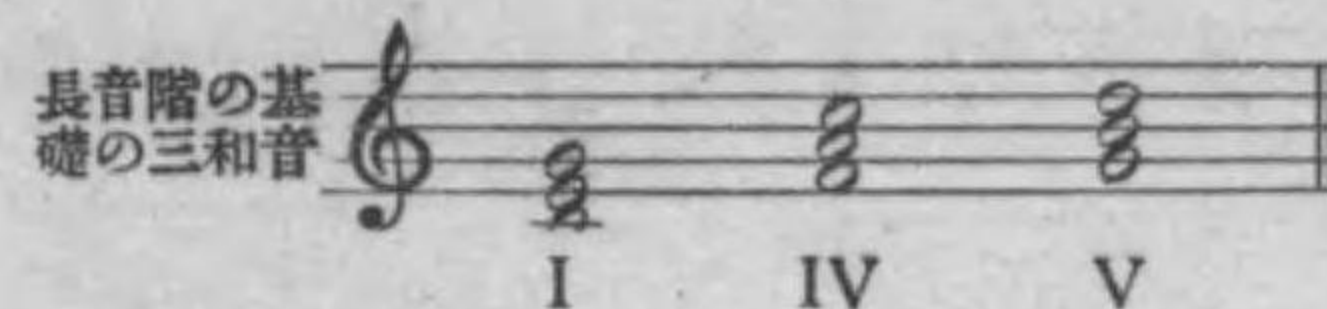
今この一度、四度、五度の三和音を音名の順序によつて配列して見ますと、次の圖の様に、一つの長音階を得ます。



長音階の基礎三和音

この三つの三和音を長音階の基

礎の三和音と名づけます。



随つて、長音階の構成法は、この方法に依つても出来ます。

第三節 短音階

短音階は長音階の第三音と第六音を半音低めたものであります。



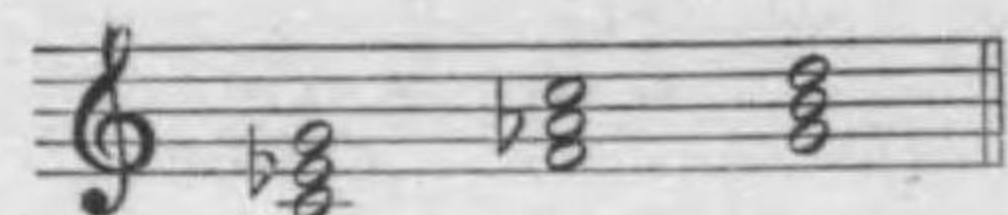
短音階には、和聲的短音階と旋律的短音階との二つがあります。

今、ハ調長音階とハ調短音階との一度、四度、五度の上に築かれた三和音を比較して見ますと次の様になります。

短音階



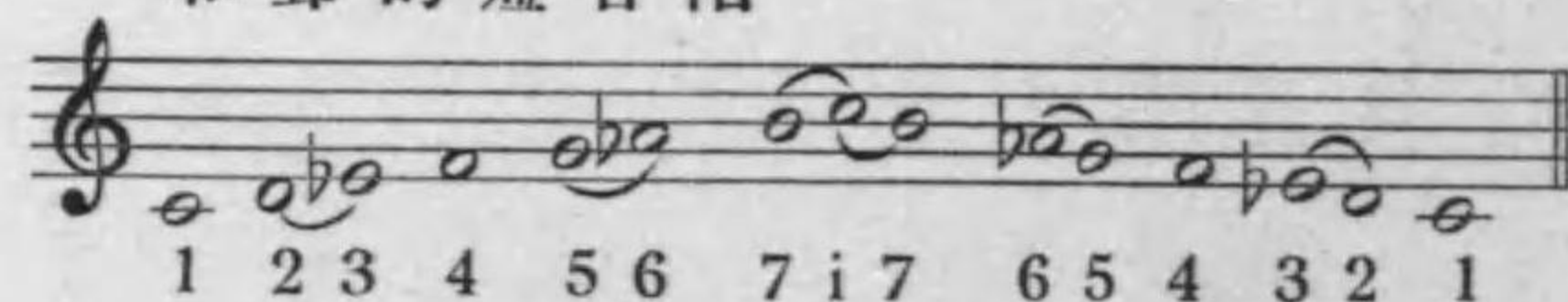
随つて、ハ調短音階の基礎の三和音は、次の三つであります。



(一) 和聲的短音階

上圖の、三つの三和音を形成して居る九つの音を、音名の順序に配列したものは、和音がその儘、その原体となつて居ますから之を和聲的短音階と云ひます。

和聲的短音階

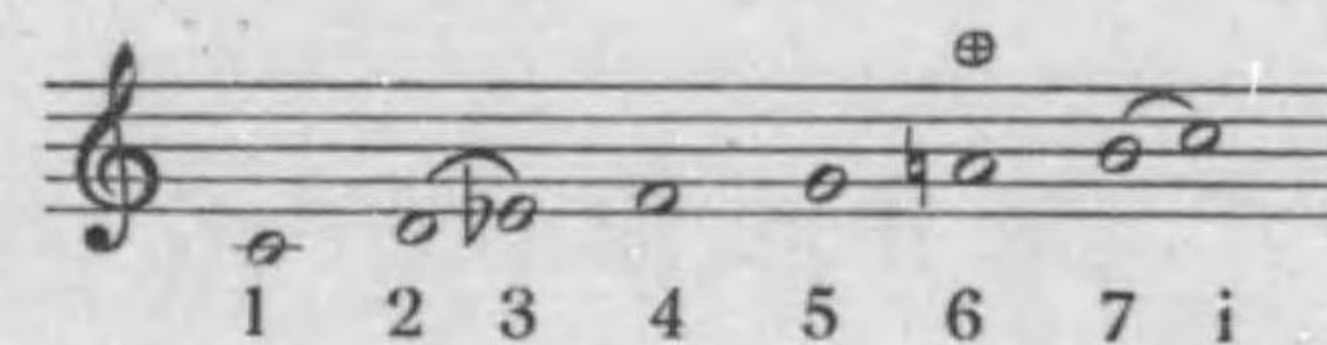


(二) 旋律的短音階

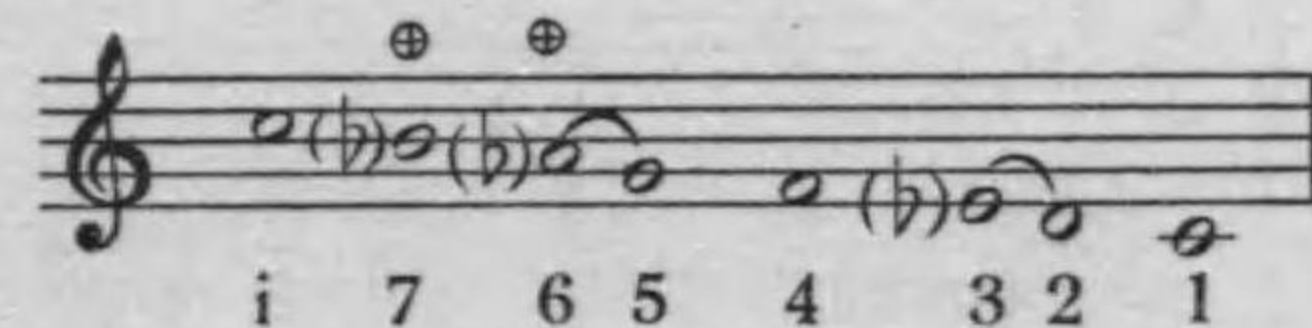
[和聲的短音階]の[第六音]と[第七音]

和聲的短音階

この間隔が、増二度であるために、それを全音と半音とからのみで成る音階とするには、この第六音を半音高めなければなりません。



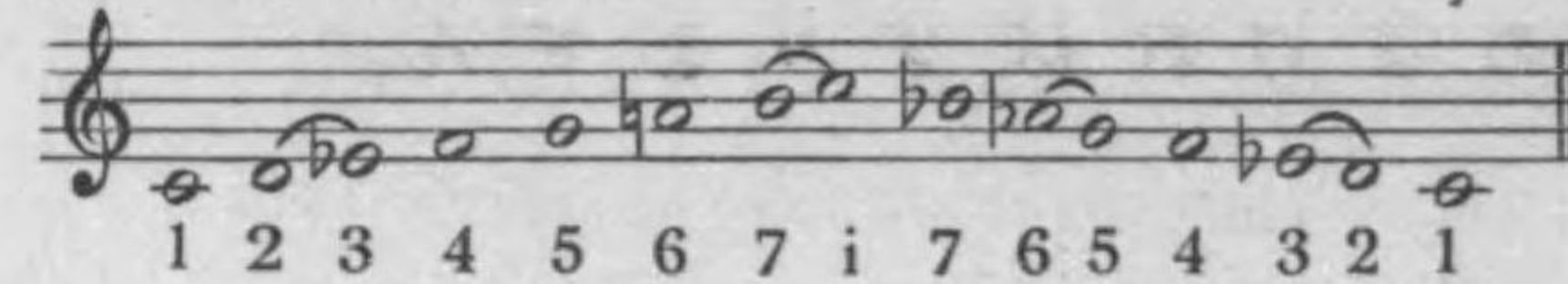
併、音階の下行する場合には、その下行する云ふ勢のために、八音と七音との間が、特に半音でなくとも構ひません。また、それと同時に短音階の特性たる、變第六音を、より多く必要とするために、第六音は變の儘とし、第七音を半音程低めて、之を滑らかな階梯とします。



之は、旋律をその主眼として居る

ところから、普通「旋律的短音階」と云ひます。

旋律的短音階



随つて、「旋律的短音階」の上行と下行とは、異つて居ります。

「短音階の構成法」は、全く「長音階」と同じであります。

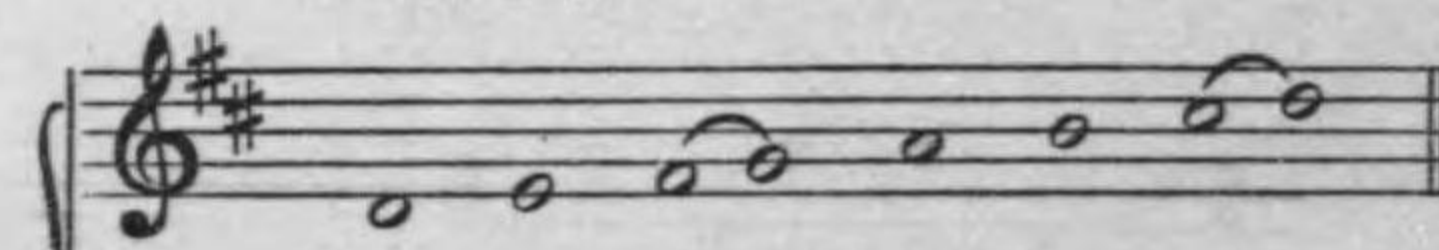
「短音階」に依つて作られたる曲を「短旋法」と云ひます。

「調子記號」の等しい、「長」「短」の「兩音階」は、何れもこれを「關係音階」と云ひます。

短旋法

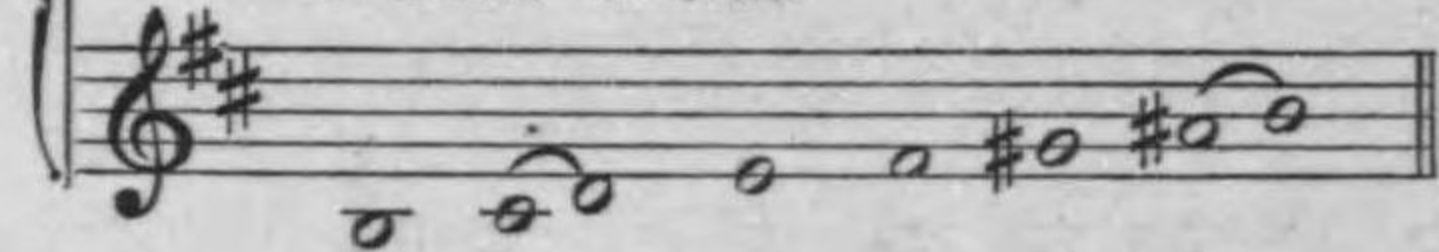
關係音階

(ニ調長音階)



(ロ調旋律的短音階)

「關係音階」



第十五章 和聲の大要

「三和音」を、或方式に従つて、連結して進行させる形式を、「和聲」と云ひます。

第一節 和絃

「音階」の「第一度」に築かれる「三和音」を、「主和絃」と云ひ、「第二度」に築かれるものを、「上主和絃」、「第三度」に築かれるものを、「中和絃」、「第四度」に築かれるものを、「次屬和絃」、「第五度」に築かれるものを、「屬和絃」、「第六度」に築かれるものを、「次中和絃」又は「上屬和絃」、「第七度」に築かれるものを、「導音和絃」と云ひます。

和聲

主和絃

上主和絃

中和絃

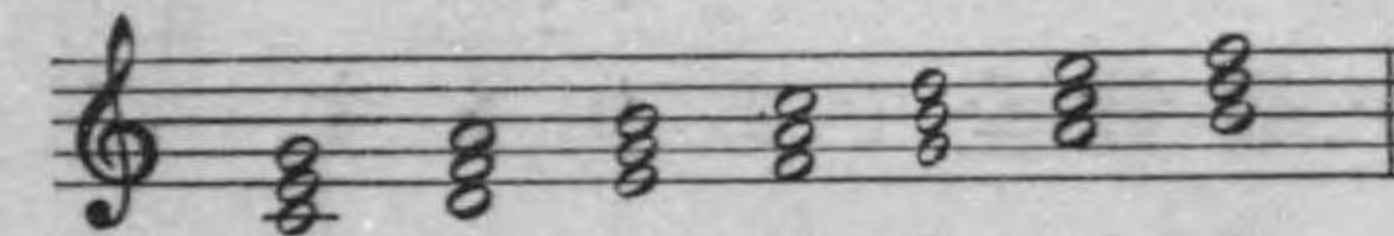
次屬和絃

屬和絃

次中和絃

上屬和絃

導音和絃



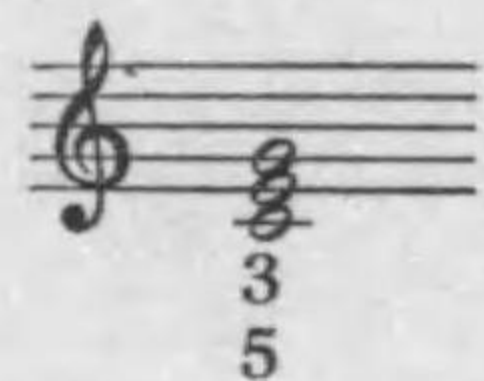
主和絃 上主和絃 中和絃 次屬和絃 屬和絃 次中和絃 導音和絃

普通和絃

五三の絃

四聲
四聲音

以上の「和絃」は、最も多く用ゐられて居るために、是を「普通和絃」と呼んで、 53 の数字を以て表はして居りますから、また之を「五三の和絃」とも呼んで居ります。

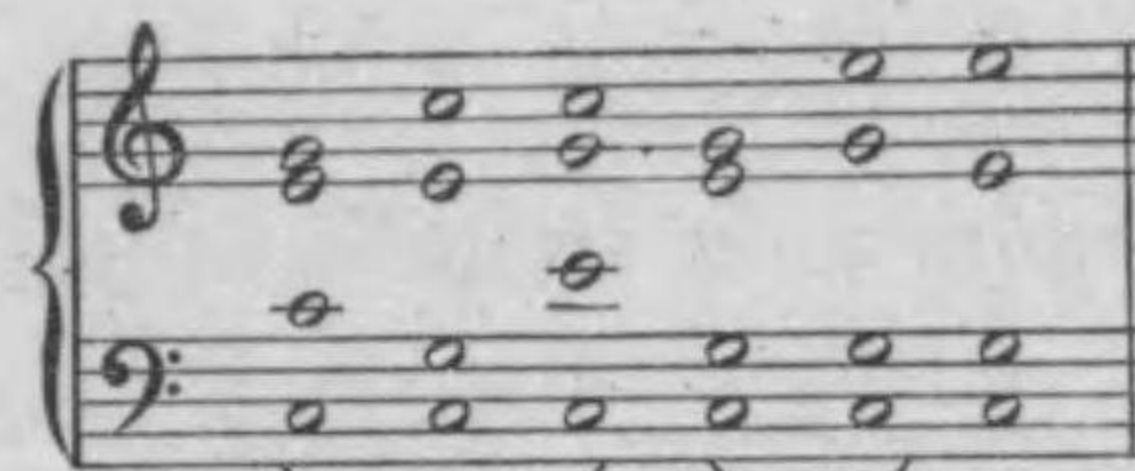


$5,3$ の意味は、譜面上に記載された「和絃」の最低の音から数へて、「三度」と「五度」とに當る音を表はしたのであります。

第二節 四つの聲音

「三和音」中の或音を重複して、四つの相和した音を作る事が出来ます。之を、「四聲」或は「四聲音」と呼びます。

重複する事の出来る音は、「基音」と「五音」とでありまして、「基音」を重ねるのが、最健全であります。「三音」を重ねる事は、特別の場合の外は、めつたご、ありません。



「基音」を重ね

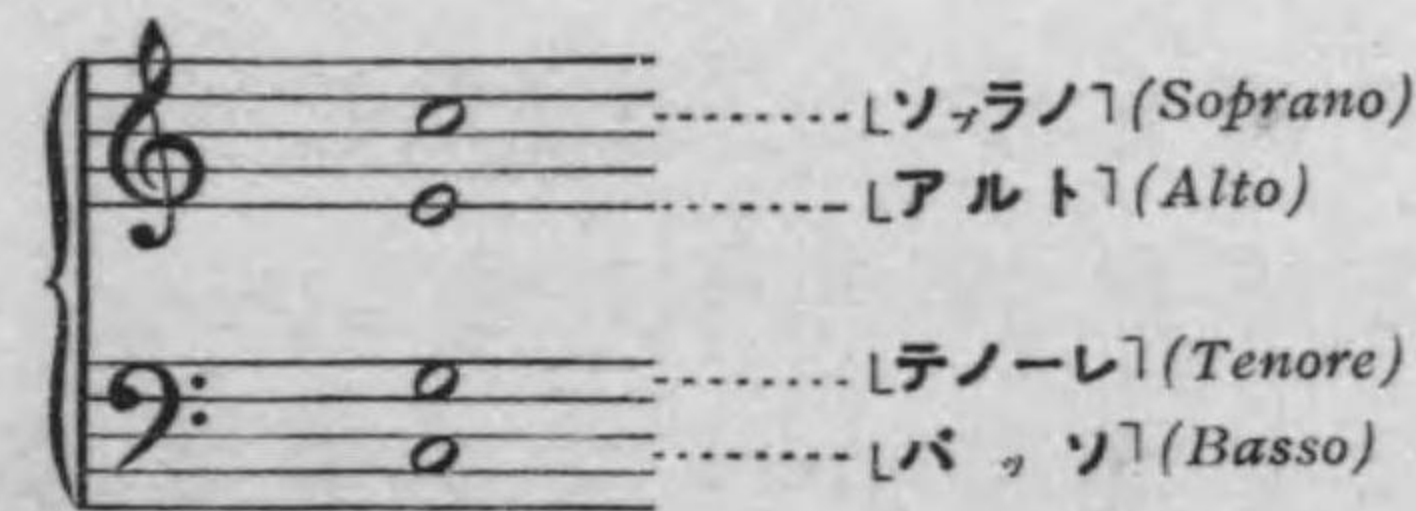
「第五音」を重ね

「第三音」を重ね

四つの聲の、一番上の音を「ソプラノ」(高音)、と云ひ、次を「アルト」(中音)、次を「テノーレ」(次中音)、一番下を「バツソ」(低音)と云ひます。

ソプラノ
アルト
テノーレ
バツソ

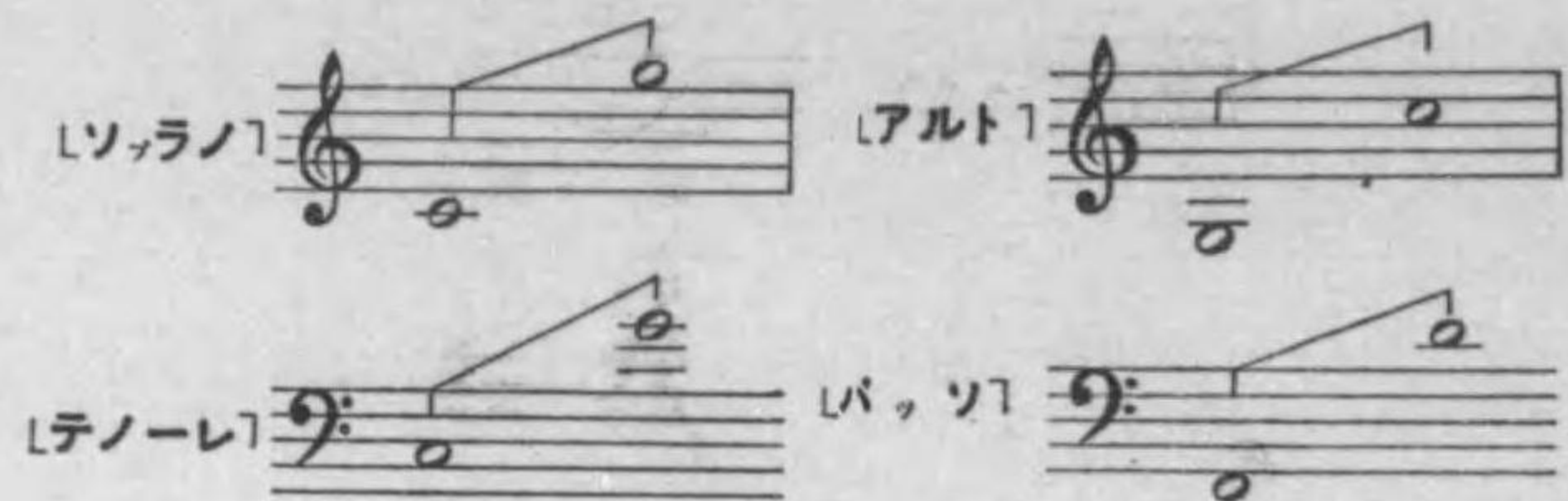
「ソプラノ」と「アルト」は、普通女性の聲で、「テノーレ」と「バツソ」は男性の聲であります。但し男子でも「ソプラノ」や「アルト」を出すことも出来ます。



合唱曲に用ゐられる、各「聲音」の區域即ち音域は、普通次の通りであり

ます。

合唱曲に於ける「四つの聲」の音域



第三節 和絃の轉回

「和絃」の「基音」若くは、「第三音」または、その他の音を、轉回した「和絃」を「轉回和絃」と云ひます。

「普通和絃」の「轉回」には、「基音」の「轉回」したものと、「基音」と「第三音」が同時に「轉回」したものとこの二つの場合があります。

「基音」の「轉回」したものを「六、三の和絃」と云ひます。これは、「低音」の上にある二音が、「低音」に對して「三度」と「六度」に當るからであります。

「基音」と「第三音」が同時に「轉回」したものを、「六、四の和絃」と云ひます。

轉回和絃

六三の和絃

これは、低音の上にある二音が、低音に對して、「四度」と「六度」に當つて居るからであります。

「六、三の和絃」は、普通、「三」を略して、單に「六の和絃」と云ひます。



第四節 四和音

「普通和絃」にその「第七音」を加へた「四和音」は、之を「七の和絃」と云ひます。

「七の和絃」は、普通、獨立し得る性質を有たない「和絃」であります。随つて、この「和絃」は、關係的の場合にのみ存在して居るために、いつも、「獨立し得る和絃」に流れ込む特性を有つて居ります。

「七の和絃」から「獨立し得る和絃」に流れ込む事を、「七の和絃の解決」と云

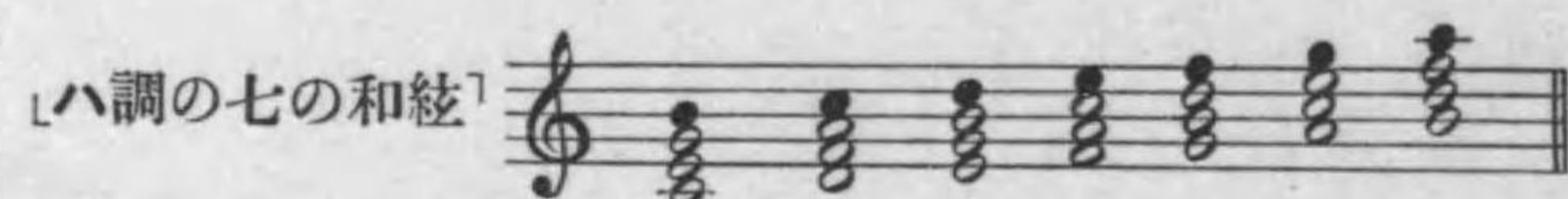
六の和絃

四和音
七の和絃

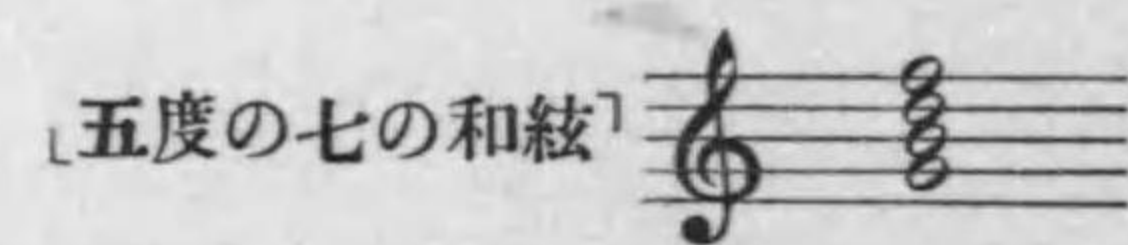
七の和絃
の解決

ひます。尙、言葉を替へて云ひますと、**「独立し得る和絃」**と**「七の和絃」**との心持は、**「恰度」**、**「安心」**と**「不安」**との心持を云ふ事が出来ます。それ故、**「七の和絃の解決」**は、**「不安」**から**「安心」**へ向ふ過程に外なりません。

「七の和絃」は、**「音階」**の何れの音の上にも構成する事が出来ます。



併、普通用られる**「七の和絃」**は、或調の**「第五度」**の上に築かれるものがあります。之を**「五度の七の和絃」**と云ひます。



「七の和絃」は、四つの音から成つて居ますから、**「四聲音」**の**「和聲」**に用られる時には、**「三和音」**の場合の様に、或

五度の七の和絃

欠

欠

①

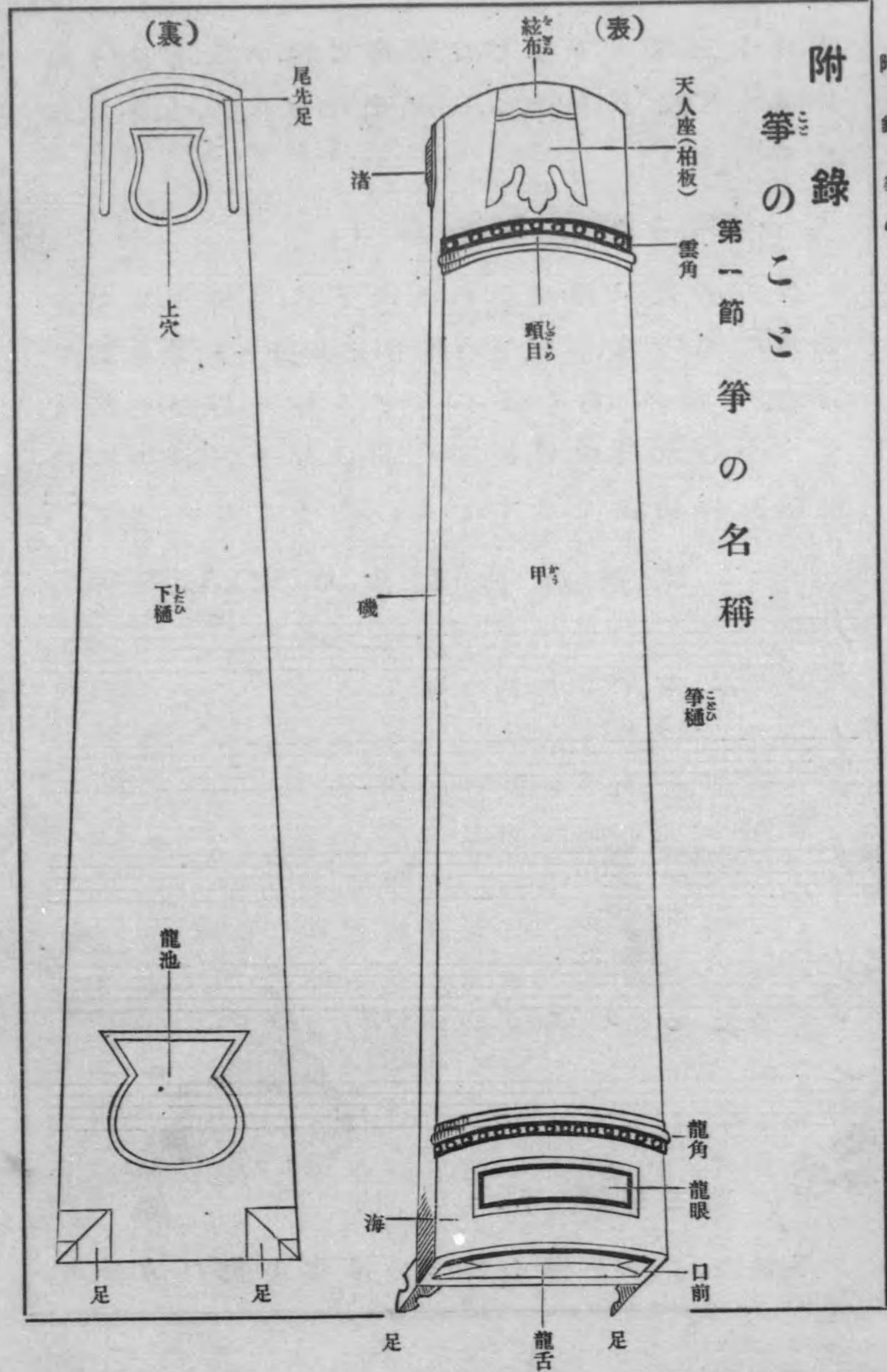
附錄

附錄 箏のここと

箏のここと

第一節 箏の名稱

箏



絃は十三本ありまして、龍角に向つて右より順に數へて、これを一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、斗、爲、巾と申します。

第二節 箏の調子

最も普通に用ひられる調子は「平調子」といふものでありますが、この外「雲井調子」「半雲井調子」「片雲井調子」「古今調子」なども屢々用ひられます。今これ等の各調子に於ける十三絃の調律法を西洋樂譜で示すと次のやうになります。

一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 斗 爲 巾

平調子
雲井調子
半雲井調子
片雲井調子
古今調子

第三節 手法

「手法」とは箏を弾くときの手指の使ひ方であ

ります。これに「右手法」と「左手法」との區別があります。「右手法」とは右手の拇指、中指、食指に各々爪を嵌めて絃を弾き音を出す方法でありまして、これに通常次の十八種の手法が有ります。

- ① 拘爪 食指より中指に移り、次に拇指にて止むる弾法。
- ② 向半拘 拘爪に於て拇指にて止めざるもの。
- ③ 早拘爪 拘爪又は向半拘を急速に奏するもの。
- ④ 掻手 食指中指の二指にて一二の絃をシャンと掻くこと。
- ⑤ 合爪 拇指、中指の二指にて八度音程に當る二絃を同時に合せて弾く事。
- ⑥ 押し合 相並ぶ二絃の低音のものを左手にて押し、高音のものと同音になし、この二絃を拇指にて同時に弾くこと。
- ⑦ 散 中指の爪横にて一絃を摺ること。
- ⑧ 連 中指及び食指の爪裏及び拇指の爪表を同時に揃へて巾の絃より低音の絃へ掛けて速かに撫で、終りに拇指にて止むる手法。
- ⑨ 輪連 中指及食指を横にして、輪を畫くやうに絃の上を撫づる法。
- ⑩ ひき引連 中指に食指を添へて、一つの絃よ

④

- り高音絃に向ひ撫づる法。
- ⑪ 半引連 はんひきれん 引連に於て一の絃より初むる代りに、途中の絃より撫で初むる法。
- ⑫ 引捨 ひきす 引連の急速にて巾の絃まで至らぬもの。
- ⑬ 流爪 ながしづめ 拇指のみにて高音絃より低音絃へ速く撫づる法。
- ⑭ 刮爪 わりづめ 先づ食指にて絃を搔き、次に中指にて搔き、終りに拇指にて止むる法。
- ⑮ 拵爪 すりづめ 食指の爪裏と中指との間にて一の絃を挟んで大きく左右に搦る法。
- ⑯ 排爪 すくひづめ 拇指の爪裏にて絃をすくひ拘る弾法。
- ⑰ 波歸 なみかへし 恰かも波の寄せてはかへす如くに、食指と中指とにて表、裏、表、と搔きかへす弾法。
- ⑱ 運 はこび 約めて弾く法。

「左手法」とは左手にて琴柱の左側に於て絃を種々に操り、裝飾を行ふ法でありまして、通常左の八種あります。

- ① 掩 おん (押し止まる色) 絃を弾きて後に押し響かす法。
- ② 押 お (押し色) 押して後に絃を弾く法。
- ③ 重押 (二段押し) 普通に押す上を尙一段強く押す法。
- ④ 控 ちっ (突き色) 絃を弾きて後左指先にて軽く

⑤

- 突く法。
- ⑤ 播 じゆ (弾き色) 絃を弾きて後、琴柱の左傍を左手にて握る法。
- ⑥ 押放 (押して放つ色) 左手にて押して絃を弾くと直ちに之を放つ法。
- ⑦ 搖吟 わうぎん (ゆる色) 押したる絃を揺り響かす法。
- ⑧ 添 てん (敷き爪) 琴柱の右傍の絃の下へ左手の食指の爪を入れ、軽く絃に觸れながら絃を弾く法。

第四節 箏曲の種類

箏曲には歌詞の附いて居るのと無いのがあります。前者を歌箏といひ、後者を調物又は段物といひます。「六段曲」「八段曲」「亂」などは段物の好例です。

「歌箏」は「組」「手事」「歌物」の三種に分れます。「組」は筑紫流又は八橋流等に多く用ひられ、八拍子又は十六拍子八行を一段として組立てられたものです。後に吉澤檢校は之に真似て「古今組」といふのを作りました。「春の曲」「夏の曲」などはその好例です。「手事」とは合の手多く旋律の複雑な曲でありまして、「晒し」などはその好例です。又「歌物」とは手法よりも寧ろ歌聲を主とした曲でありまして、「白の聲」その他「地唄」は凡て之に屬します。

—(附録終)—

大正五年八月廿日印刷

大正五年八月卅日發行

(近代樂典大要 定價金貳拾七錢)

著作權所有



著 作 者

音 樂 研 究 會

大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷

發 行 者

三 木 佐 助

大阪市西區土佐堀通四丁目十二番屋敷

印 刷 者

三 有 社

大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷

發 行 所

大 阪 開 成 館

大阪市東區北久寶寺町心齋橋筋角

西 部 販 賣 所

三 木 樂 器 店

東京市日本橋區數寄屋町

東 部 販 賣 所

林 書 店

大阪開成館發行教科書目

山田耕作著
音程 視唱教本
定價金參拾錢

音樂研究會編
女子教育 音樂教科書
全四冊 定價各參拾五錢

音樂研究會編
新撰 オルガン教科書
定價金五拾錢

開成館音樂課編
教科通用 進行曲粹
第一輯 定價四十五錢
第二輯 定價四十錢

教育音樂講習會編
新編 教育唱歌集
合本定價金壹圓五拾錢

吉田恒三著
音 樂辭書
定價金五拾錢

齊藤佳三著
新 らしき民謠
定價金五拾錢

開成館音樂課編
新撰 音程教科書
定價金拾八錢

開成館音樂課編
實科女學唱歌
全三冊 定價 上中各貳拾貳錢
下參拾錢

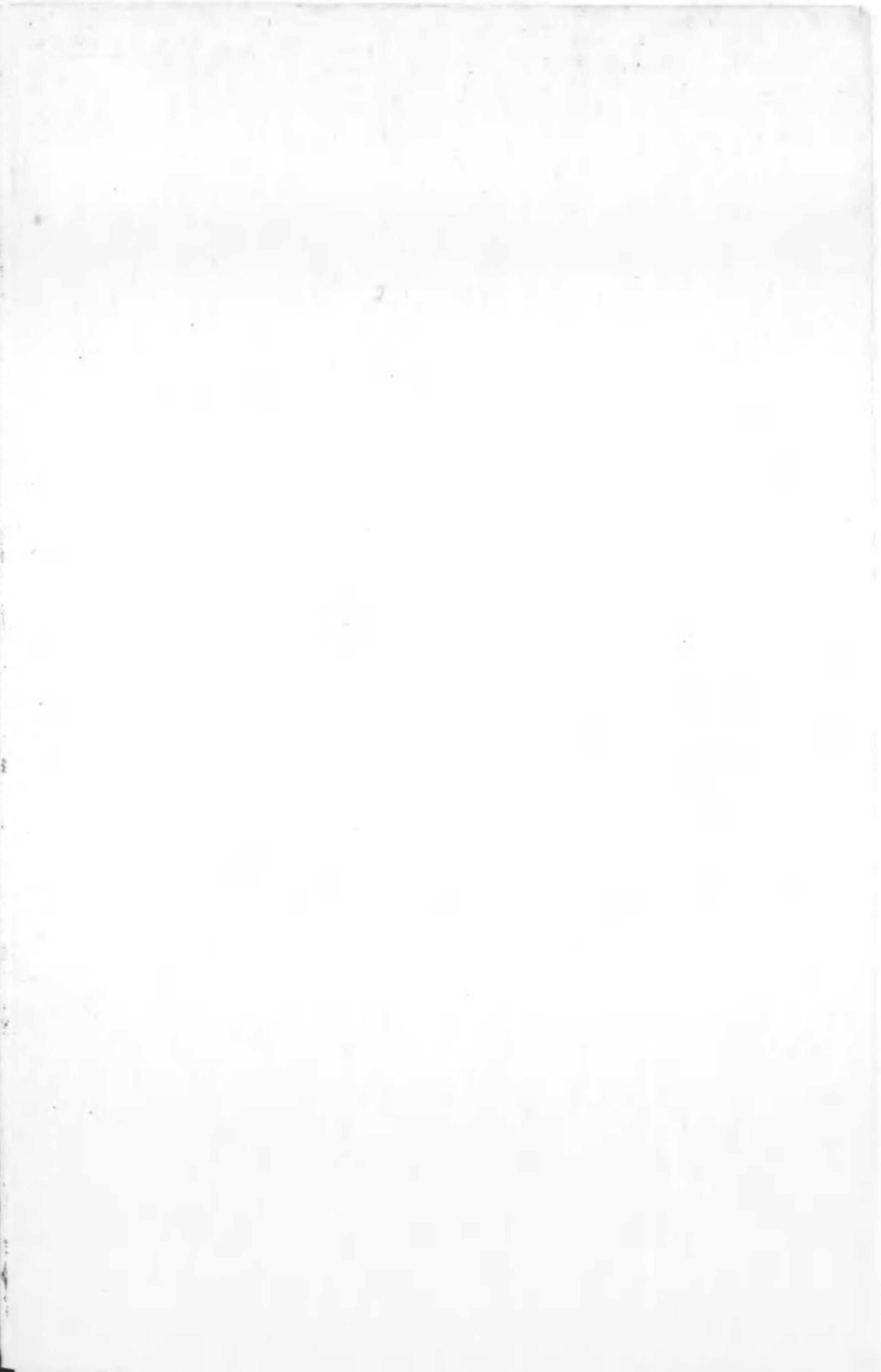
天谷秀、多梅雅共編
初等 オルガン教科書
定價金五拾錢

三木音樂課編
速成ヴァイオリン教本
定價金五拾錢

開成館音樂課編
ヴァイオリン教則本
全二冊 定價金各五拾錢

開成館音樂課編
撰定オルガン教本
定價金五拾錢

小松耕輔編
最新 ピアノ教科書
定價金八拾錢



320
252

終